

## <日本の真相>

古代日本には、物部王朝があった。そこへ、原始キリスト教の流れを汲む秦氏が来日した。そして、ある目的のために国中をカッパーラで封印し、今日に至る。それには、日本固有と思われている神道（しんとう）が大きく関わっている。その神道を理解するためには、<ユダヤ教>と<キリスト教>の内容をしっかりと把握しておく必要がある。勿論、日本神話を踏まえた上で。

これらの情報は、飛鳥昭雄・著「学研ネオ・パラダイム ASKA シリーズ」を集大成し、小生の考えを加筆したものである。このシリーズは以前から知っていた。しかし、天照大神はイエス・キリストである、なんてよくあるこじつけ話だし、中には漫画形式のものもあるので、気にも掛けていなかった。それに、飛鳥氏はサイエンス・エンターテイナーなので、このシリーズでは UFO などの著書が本命である。それを讀むと、ちょっとこれは…というものもある。

しかし、最近の日本古代史研究などを讀むと、古代の天皇は朝鮮半島から渡来した大王であることが書かれている。それなりに妥当性はあるが、新たに疑問が生じた。ならば、何故、朝鮮半島から来なければならなかったのか？万世一系が必要な本当の理由とは？それ以前の天皇や日本はどうだったのか？と。それで、飛鳥氏の一連のシリーズを思い出し、書店で手にしたところ、天皇家は朝鮮半島から来た騎馬民族の大王であり、当時の半島も高句麗、新羅、百濟、（任那ではなく）伽耶と正しい国名が記されていた。それで、一気呵成に読み進めたのである。

飛鳥氏はモルモン教徒であるから、聖書には詳しい。そして、モルモン教は三位三体の教えである。しかし、それは三位で唯一絶対神を表す考えではないし、また、モルモン教は米国から救世主が誕生するなどと言っており、米国カルト系キリスト教の根源でもある。それに、宇宙論や超常現象解釈から、彼は Web 上でもいろいろ言われている。

しかし、彼が神道の奥義を司る「八咫鳥」と直接対談して得た情報であること、そして、論理的に一本筋が通っていることから、「八咫鳥」と直接対談したことも、そこから得た情報というのも、“正しい”と判断した、いや、判断せざるを得ないのである。とても、空想や思いつきで書けるような代物ではないのである。特に、内容が皇室や神道、伊勢神宮の根幹に関わることなので、一度発行しても、不敬罪などで回収されて発禁となるだろう。しかし、再版もされているのである。著書の中に、漫画で皇室関係者が「この件について皇室は無関係である」と言っている場面があるが、おそらく、そうなのであろう。なお、「八咫鳥」については後で詳細説明するが、特別な伝（つて）が無いと会うことすら不可能。対談できても、相手に深い知識と理解が無いと判断されれば、即座に対談は打ち切れ、以後二度と神道の奥義に近づくことは許されない。昔は、目、耳、口を潰され、手を切られ、闇に葬られたそうだ。そこまでしても守るべき「奥義」とは？以下、その内容をまとめたので、紹介する。

### (1) 古代物部王国と籠神社

古代日本は、物部王国であった。彼らは、海のシルクロードを渡ってきたイスラエルの失われた十支族の中の一部の者たちである。日本の建国は BC660 年であり、失われた十支族が建国したと考えても良い年代である。(北朝が滅亡したのは BC722 年。物部氏については未知の部分が多く、現在、調査中である。)

最も勢力を誇っていたのは、東海地方から畿内まで治めていた尾張氏(尾張地方の名の由来)と、畿内から丹後付近までを治めていた海部(あまべ)氏である。尾張氏は代々熱田神宮の宮司の家系であり、別姓が海部氏である。つまり、尾張氏と海部氏は同族の物部氏である。よって、愛知県西部に海部(あま)郡があり、海部(かいふ)なる姓がある。

海部氏こそ、代々、京都の天橋立の袂にある籠神社の宮司の家系である。籠神社の謂われには、次のようにある。

“神代と呼ばれる遠く遙かな昔から奥宮真名井原に豊受大神(トヨウケノオオカミ)をお祀りしてきましたが、その御縁故によって人皇 10 代崇神天皇の御代に天照大神が大和国笠縫邑からお遷りになって、之を吉佐宮(よさのみや)と申して一緒にお祀り致しました。

その後、天照大神は 11 代垂仁天皇の御代に、又豊受大神は 21 代雄略天皇の御代にそれぞれ伊勢にお遷りになりました。それに依って當社は元伊勢と云われております。

両大神が伊勢にお遷りの後、天孫・彦火明命(ヒコホアカリノミコト)を主祭神とし、社名を籠宮(このみや)と改め、元伊勢の社として、又丹後国の一之宮として朝野の崇敬を集めてきました。

極秘伝に依れば、同命は山城の賀茂別雷神と異名同神であり、その御祖の大神(下鴨)も併せ祀られているとも伝えられます。尚、彦火火出見命(ヒコホホデミノミコト)は、養老年間以後境内の別宮に祭られて、現今に及んでいます。彦火明命は天孫として、天祖から息津鏡・辺津鏡を賜わり、大和国及丹後・丹波地方に降臨されて、これらの地方を開発せられ、丹波国造の祖神であらせられます。又別の古伝に依れば、十種神宝(天祖から賜った剣などの十種類の御神宝のことで、物部氏の長が持つ印)を将来された天照国照彦天火明櫛玉饒速日命であるといひ、又彦火火出見命の御弟火明命といひ、更に又大汝命の御子であるといひ、一に丹波道主王とも云う。”

最初に祀られていたのは豊受大神という神で、奥宮真名井(まない)原であった。奥宮真名井原は真名井稻荷神社のことであり、祭神は宇迦御魂(ウカノミタマ、保食神、豊受比売、天孫降臨でお供として降りた食べ物の神である登由宇気神)であるから、豊受大神=宇迦御魂である。「ウケ」と「ウカ」は同じ。)いわゆる“お稲荷さん”である。お稲荷さんは保食と五穀豊穰を願う神である。豊受大神が、伊勢神宮の外宮で天照大神へ食を捧げる神として祀られているのは、そのためである。つまり、この神社は天照大神信仰ではなく、元はお稲荷さんだったのである。

ここで言う極秘伝とは、表に出せる「公式な極秘伝」であり、裏の極秘伝に

よると、本来の主神は「天之御中主神」であり、古事記で最初に現れた神である。すなわち、豊受大神＝天之御中主神である。

また、天照大神が大和の笠縫邑から移動してきて、それを吉佐宮（よさのみや）＝与謝宮として祀り上げた。そして、天照大神は伊勢の内宮に、豊受大神は外宮に移動した。天照大神の御神体は何箇所か移動し、ようやく伊勢に落ち着いたのである。つまり、伊勢神宮内宮の原型は移動式の幕屋で、ヘブライの移動式神殿と同じなのである！実は、神社とイスラエルの神殿の構造は、まったく同じである。

多くの囲いに囲まれ、2本の門がある。内部には、神社では手を清める手水舎（てみずや、ちょうずや）が、神殿では洗盤がある。そして、神社では拍手を打って祈りを捧げる拝殿、御神体と祭壇が安置されている本殿の二重構造であり、神殿では拝殿である聖所、本殿である至聖所の二重構造である。また、拝殿の前には幕が下がり、至聖所の入り口には大きな垂れ幕が下がっていた。そして、ソロモンの第一神殿はレバノン杉などの木製であり（第二神殿は石）、神社も木製である。

更に、神社の拝殿の上には大きな注連縄（神界との結界を表す）があり、そこには稲妻の形を模した紙垂（かみしで）が下げられている。つまり、注連縄は雷雲なのである。となると、お祈りする前にガラガラと鈴を鳴らすのは、雷鳴である。そして、その下には（賽銭）箱がある。これは、ヤハウエが「契約の箱アーケ」の上に降臨する時の情景そのものである！

すなわち、神社とは、古代イスラエルの神殿そのものである。であれば、豊受大神＝天之御中主神＝ヤハウエか？

ひとまず先へ進もう。籠神社には海神がワタツミノカミ（「海幸彦と山幸彦」で登場）として祀られているが、宮司によると、実は先祖は海神ではなく天之御中主神であることから、“海で生活していた人”ではなく、“海を渡ってきた人”である。同系統の物部氏としては、三重県志摩地方の的矢氏があるが、この付近は海女さんが有名で、やはり“海女＝あま＝海部”である。

他にも天照皇神社（天照大神の和魂（にぎたま）または荒魂（あらたま））、猿田彦神社、蛭子（えびす）神社がある。蛭子の前に“水”を付けたら水蛭子、ヒルコだ。ということで、古事記の有名どころが大体揃っている。

ところで、現在の籠神社の主祭神は、彦火明命＝賀茂別雷神＝天照国照彦天火明櫛玉饒速日命、別名天火明命天照御魂神天照国照彦火明命饒速日命であり、古事記の天孫降臨も合わせると＝天津日高日子番能邇邇芸命となる。＜日本神話＞では賀茂別雷命＝神武天皇＝神武天皇の皇后であり、「海幸彦と山幸彦」では火照命が兄、火遠理命が弟であったのにも関わらず、ここでは火火出見（ホホデミノミコト）命の弟である火明命＝火照命となっている。ホホデミとは山幸彦＝火遠理命のことだから、兄と弟の立場が逆転している。

このような事実、そして、矛盾する神々の名前や性質に着目し、ある法則を

見つけたのが、第 82 代宮司、海部光彦氏である。それを「多次元同時存在の法則」と言う。その法則は、次の通りである。

- ・神のみに適用される。“原則として” 実在の人間には適用不可。
- ・神の世界故、時間と空間を超越する。
- ・神は分身を造ることができる。
- ・その分身は別名として表現される。
- ・同じ名前の神（同じ「読み」を含む神）は、同一神である。

この法則に従い、神話の神々、籠神社に祀られている他の神々なども合わせれば、

「天之御中主神」＝「豊受大神」＝宇迦御魂＝彦火明命＝火火出見＝賀茂別雷神＝天照国照彦天火明櫛玉饒速日命＝天火明命天照御魂神天照国照彦火明命饒速日命＝天照国照彦火明命＝天火明命＝天照御魂神＝天照国照彦＝火明命＝饒速日命＝「天照大神」＝「猿田彦」＝「素戔鳴尊」＝……＝「神武天皇」

という図式が出来上がる。つまり、「八百万（やおよろず）の神々」と言われている日本神話の神々は、（天孫の系統は）すべて、天之御中主神＝豊受大神＝天照大神に収斂する、唯一絶対神崇拝なのである！（天宇受売命、天太玉命、天児屋根命のような単発の神はこの系統ではない。）

このように、1 人の神を、名前を変えて分けることを「分魂（わけみたま）」と言う。

失われた十支族は背教＝多神教崇拝が原因で滅びた北朝の末裔なので、それに懲りたかどうかは知らないが、信仰としては唯一絶対神＝ヤハウェを忘れてはいなかった。そのため、各物部の部族が（物部一族は全国に広がっていた）、それぞれに都合の良い名前で、自分たちの先祖に絡めて唯一神ヤハウェを祀り上げ、更に自然信仰まで加えていたのが、古代物部王国の実態である。つまり、ヤハウェの大元の日本名が、天之御中主神である！

モーゼの預言（申命記 28 章 46 節）に、“主は地の果てから果てに至るまで、すべての民の間にあなたを散らされる。あなたも先祖も知らなかった、木や石で造られた他の神々に仕えるようになり…”とあり、多神教になることが預言されており、しかも、神道では木や石にも神が宿るとする。しかし、それらは仏像などの偶像ではなく、依代（よりしろ）である。そして、神社の形式は臨在の幕屋形式である。偶像が無く、臨在の幕屋（形式の神社）に宿るのはヤハウェである！

天之御中主神＝豊受大神＝ヤハウェの証拠が他にもある。豊受大神は伊勢神宮の外宮でも祀られているので、籠神社は外宮の「元伊勢」という。その豊受大神は内宮の天照大神に食事を作る神なので、食料の神である。名前からしてそうである。“豊かな実りを受ける（授ける）”ということである。

さて、モーゼがヘブライの民を率いて“約束の地”へ向かっていた時、ヤハウエは食料として天からマナを降らせた。つまり、ヤハウエも食料に関係がある。(マナは“マンマ”の語源でもある。)

また、豊受大神＝宇迦御魂であり、お稲荷さんである。“いなり”には“稲”という字がある。稲は、雷がよく鳴る年には豊作になるという言い伝えがある。それ故、雷は“稲の妻”、稲妻なのである。また、ヤハウエが降臨する時は、必ず雷雲と稲妻を伴った。稲の中は白い米であり、ヤハウエが授けたマナは白いウエハースのようなものであった。

そして、決定的なのが、籠神社の御神体である。これも極秘伝であるが、その御神体は純金でできたイスラエルの三種の神器の1つ、「マナの壺」である！これが、奥宮真名井原、すなわち、奥宮である真名井稲荷神社に祀られていた。真名井とは、勿論「マナの壺」に由来するものである。代々、宮司を継承すると、純金の壺を僅かばかり削り、それを飲むことが継承の願しだったらしい。今は“神隠し”にあって壺は存在しない。御神体が神隠しにあうというのは、裏がある。そう、伊勢神宮外宮の“本物の御神体”として祀られているのである。これで、外宮の神が食料の神であることが物的にも納得できる。

よって、外宮の表向きの御神体は壺と一体となった勾玉、すなわち「八尺瓊勾玉」である。(山幸彦の首飾りの珠＝勾玉が壺にくっついて取れなくなったことを思い出そう。これで、海神が海部氏の象徴であることが解る。)  
「八尺瓊勾玉」は現在、皇居にある。

籠神社は天橋立の袂にある。天孫降臨となった場所は、全国にいろいろあるが、天橋立を伴うものはここしかない。天橋立は、天浮橋が倒れたもの。似たようなものにヤコブの階段(梯子)がある。アブラハムの孫ヤコブ(後のイスラエル)は、旅の途中、野宿して夢を見た。先端が天まで達する階段が地に立てられ、天使たちが昇り降りしていた。そして、天橋立も同様に神が昇り降りしていた。故に、天橋立のモデルはヤコブの階段(梯子)である。

このように、海部＝尾張氏が失われた十支族であることは、間違いない。そして、御神体「マナの壺」があった真名井稲荷神社の社紋は六芒星、ダビデの星だったのである！(現在は、「八咫鳥」から圧力が掛かって、通常の三つ巴紋に変更されている。)

よって、これらのことから、ヤハウエ＝天之御中主神であると言える。

ヤハウエ＝天之御中主神＝豊受大神＝天照大神＝猿田彦(＝……＝神武天皇)  
で、イエスは御子＝ヤハウエ＝イエスということをも明らかにしたから、

イエス＝天之御中主神＝豊受大神＝天照大神＝猿田彦(＝……＝神武天皇)

としたいところであるが、物部王朝の段階ではできない。何故なら、彼らは北朝、失われた十支族の末裔であるから、イエスが誕生する以前に極東まで来ており、肉体を持ったイエスの存在は知らないからである。

海部氏がこれほどの御神宝を持っている以上、同族の尾張氏もそれに匹敵するものを持っているのが筋というもの。ならば、残りの「アロンの杖」（「アーク」は南朝が持っていた）である。これが日本の三種の神器の1つ、「草薙の剣」として熱田神宮で祀られているのである！「アロンの杖」と「草薙の剣」は共に蛇に関係があり、両方とも善が悪に勝ったところも似ている。更に、“薙”という言葉自体が“蛇”を表しているが、それについては後述する。

「草薙の剣」は安徳天皇が瀬戸内海に没した時、共に沈んだ。しかし、その後、源氏の兵が浜に漂っているのを見つけ、それが熱田に戻された。いくら御神宝といえども、鉄や銅の剣ではそんなことはあり得ないし、錆びてしまう。浮いてきたのは、「木の杖」だったからである。また、江戸時代にこっそり盗み見た僧侶は、切腹を命じられた。天皇陛下といえども、御神宝を直接見ることは禁じられているのである。何故か？

なお、前述の十種神宝は物部氏の長が持つ印であるが、物部氏が失われた十支族ならば、各族長の印と見なすことができる。つまり、物部氏が失われた十支族であることを、十種神宝として象徴しているのである。

## (2) 秦氏の起源

古代物部氏は、海のシルクロードを渡ってきた、失われた十支族の中の一部の者たちであった。これと同じく、陸のシルクロードを渡ってきた者たちもいる。それが秦氏である。

秦氏は朝鮮半島からの渡来人であり、土木工事や鉄器製造、機織りなどに優れた殖産豪族であることは知られている。例えば、京都の嵐山は秦氏の拠点の1つであり、桂川の治水工事や有名な渡月橋の建造は、その例である。それだけでなく、彼らは芸術的センスにも優れ、秦氏の氏寺、広隆寺にある新羅様式の弥勒菩薩半跏思惟像は国宝第1号に指定されたほどのものである。

秦氏は弓月君（ゆづきのきみ）に率いられて渡来したと言われている。そのためか、彼らが関係するところは、“月”に関する名前が多く見受けられる。例えば、先ほどの渡月橋。桂川の“桂”は月に生えている伝説の木であると言われる。また、月読命を祀る月読神社は秦氏の創建である。さて、秦氏とは何者なのか、見ていこう。

北朝イスラエルが滅亡後、北朝十支族は歴史から消えた。聖書には、失われた支族は東で膨大な数になっている、とある。そして、彼らは「マナの壺」と「アロンの杖」を携えていた。

エルサレムから見て東側、大陸には多くの遊牧民が生活していた。スキタイ族、サルマタイ族、匈奴、鮮卑、烏桓などである。ユダヤ民族は元々遊牧民の血統であるから、いつしか遊牧民と同化した。遊牧民は宗教に対しては寛容であるので、彼らが何を信仰していても問題なかった。そして、次第に極東方面までに達していた。このような騎馬民族が、大国中国をして、戦々恐々とさせていたのである。その防衛手段として造られたのが、万里の長城である。

BC2世紀ごろには、東北アジアにツングース系騎馬民族「扶余、夫余」が出現した。その大王の名が「解夫妻（ヘブル）」であり、当然ヘブライのことである！

従って、扶余族こそ、失われた十支族の流れなのである。

彼らは朝鮮半島に達し、高句麗を建国した。更に南下し、元々あった馬韓（農耕民族）に加え、辰（秦）韓、弁韓を建国した。（辰韓と弁韓はそれぞれ 12 カ国に分かれていた。つまり、同じ扶余族でも、様々な部族から構成されていたことを意味する。）これらは、後にそれぞれ百済、新羅、伽耶になった。これを裏付ける資料が、古代朝鮮の歴史を記した「三国史記」の中の「百済本記」である。

「百済本記」には、百済の歴史が記されている。その建国神話では、解夫妻の息子、朱蒙（シュモウ）には 2 人の息子がおり、兄が沸流（フル）、弟が温祚（オンソ）と言った。彼らは一族を率いて南下し、フルは海側に、オンソは内陸に国を造った。オンソの国は百済へと発展したが、フルの方は土地がやせて衰退。これを恥じ、フルは自殺した。だが「百済本記」の序文には、始祖はフルであるとも記されている。しかし、フルの行方がまったく解らないのである。そして、古代の半島では、死んだことになっているのは、他の国へ行ってしまった場合が多い。（天智天皇や天武天皇もそうである！）

さて、百済王家の姓は解氏と真氏であり、出自は扶余族とある！つまり、百済王家は高句麗から分かれたツングース系騎馬民族、扶余族の流れなのである。当時、東北アジアに広がっていた騎馬民族はまとめて“秦人＝流浪の民”と中国から呼ばれていた。つまり秦氏である。解氏は繁栄したのだが、真氏は滅びた。よって、解氏＝オンソであり、真氏＝フルである。そして、解氏の“解”は、解夫妻の“解”である。

ここで、真氏＝フルの行方を追う前に、もう一方のイスラエルの支族、南朝の行方を追ってみよう。

当時、中国ですら、神が住む国として崇めていた場所がある。それは、西王母伝説に見られるような不可侵地域で、名が示す通りの天の山、天山山脈の麓の弓月王（ゆんず）国＝新月王国＝三日月王国であり、弓月城（くるじゃ）とも言った。他に亀慈（くちや）とも書く。この国は、夜も製鉄の火の明かりが消えないハイテク国であった。製鉄はシュメールからヒッタイトへと受け継がれた。当時、夜に光があることは滅多に無かったことから、神の国と見なされ、それ故に“天山”である。また、この地名はヘブライ語で“ヤマトゥ”と呼ばれており、“神の民”の意味であり、イスラエルの十二支族を象徴するのである！そして、“やまと”の語源でもあるのだ！どうも、ここに原始キリスト教徒が来たようなのである。

ついに南朝ユダ王国も滅亡寸前になると、異教徒の手に落ちる前に、原始キリスト教徒の祭司（レビ）一族は密かにアークを持ち出していた。原始キリスト教徒は祭司一族と共に、失われた十支族の後を追ってシルクロードを東征したのである。「契約の箱アーク」とイエスに関する物を持ち出して。

何故、彼らを追ったのか？1 つには、彼らは「マナの壺」と「アロンの杖」を持っている。そして、もう 1 つはイエスの教えである。イエスは、ユダヤ人の

みに対して伝道したが、“イスラエルの家の失われた子羊”にも伝道しなければならないとしていた。子羊とは神の生贄であり、神の僕のことである。それは、神と契約を交わした、失われた十支族のことに他ならない。そして、聖書には、失われた支族は東で膨大な数になっている、とある。そこで、ユーフラテス川を越え、シルクロードを東征していくと、ヤマトウの地に当たる。そこで彼らは、元々いたシュメール～ヒッタイトの末裔と同化し、鉄器製造、土木工事、芸術などの高度な技術を受け継いだ。

彼らが更にシルクロードを東征して中国へやって来た時、中国式の名前、すなわち、漢字で姓と名が必要とされた。ユダヤ人は姓が無かったので、何か姓を付けなければならない。中国は彼らの姓を“秦氏”とした。“秦”とは“秦の始皇帝”の“秦（シン、チン）”ではない。当時、中国ではローマ帝国のことを大秦と書いた。この頃のエルサレムは、ローマ帝国領であった。大秦から字を採って“秦氏”、また先ほどのように“秦人”で“流浪の民”の意味がある。彼らが、放浪の民だったからである。更に、彼らが自分たちのことをアラム語で“イエフダー（ユダヤ）”と言っており、「フダー」から「ふた」「はた」としたのである。（中国や朝鮮半島の非ユダヤ系秦氏は「チン」と読む。）

よって、南朝の原始キリスト教エルサレム教団の彼らこそが、本当の秦氏なのである。

彼らは中国と戦ったり牽制したりすることなく、失われた十支族の後を追った。そして朝鮮半島に達し、とうとう失われた十支族の流れを汲む扶余族と合流した。そして、更に南下して伽耶に達した。（伽耶の元は弁韓であり、辰韓と弁韓はそれぞれ 12 カ国に分かれていたことから、伽耶はエルサレム教団の秦氏が建国したのではなく、伽耶の中の一国が彼らの国だった、と推測するのが妥当だろう。）そして、文化的には新羅（辰韓）の様式を継承していた。

しかし、4 世紀頃に中国が台頭すると、高句麗がそれに抵抗。そして半島全体が動乱に巻き込まれた。この頃の伽耶は新羅と百済に挟まれた小国だったので、海を隔てた九州物部王国と同盟を結んでいた。

この動乱を機に、伽耶に居た十支族の流れを汲む騎馬民族が、東シナ海を渡って九州物部王朝に渡来した。その頃の遺跡に、突如として馬具が多く見られるのは、そのためである。その大王こそが、伝説上で海側に国を造ったが衰退し、自殺したと言われている、フル、真沸流なのである！

秦氏は弓月君に率いられて来日したとあるが、それが真沸流ではない。真沸流は失われた十支族の流れを汲む騎馬民族の大王であり、“秦人”と呼ばれていた秦氏である。エルサレム教団の秦氏ではない。しかし、外から見れば、同じユダヤ系の区別のつかない秦氏なのである。

また、弓月君なる人物は存在せず、“秦氏を表す象徴”である。これは、当然、先の弓月王国に由来するものである。（京都・太秦、広隆寺の側にある大酒神社では、秦氏の首長として、秦酒公、秦の始皇帝と共に弓月君が祀られている。

ここでは“ゆんずのきみ”と読ませており、弓月王国に由来していることが解る。しかし、秦の始皇帝とは関係無い。カモフラージュである。）

また、騎馬民族は宗教に寛容といえども、エルサレム教団系の秦氏が保有する、何かと曰く付きの「契約の箱アーク」の存在は知っており、自分たちの祖先もアークに降臨するヤハウエを信仰していた。そして、アークこそが王権の中の王権の印である、と。そのため、エルサレム教団系の秦氏は、大王からも一目置かれる存在であった。

つまり、朝鮮半島から渡来した秦氏とは、最初が失われた十支族の末裔の騎馬民族であり、後の日本の根幹を形成することになる中核の秦氏は、原始キリスト教エルサレム教団（特に祭司一族）だったのである。

### (3)大和朝廷

失われた十支族の流れを汲む騎馬民族の大王、真沸流が東シナ海を渡って九州物部王朝に渡来した。そこで、真沸流は婿入りし、物部王朝の大王となった。すなわち、絶対神ヤハウエ＝天之御中主神信仰となったのである。この時、何故、すんなり婿入りして大王になれたのか？それは、同族ということもあるが、ユダヤの三種の神器の1つを持っていたからである。

古代物部王朝で、海部氏と尾張氏の勢力が強かったのは、彼らが「マナの壺」と「アロンの杖」のどちらか、あるいは両方を持っていたためと思われる。そこへ、真沸流がもう1つの三種の神器を持ってきた。アークだとしたら、エルサレム教団の秦氏から譲り受けなければならず、原始キリスト教徒に改宗する必要がある。しかし、物部氏に婿入りすると、また改宗しなければならない。もともと、失われた十支族の流れを汲む騎馬民族は信仰心が薄く、宗教にはこだわらなかった。そもそも、背教が原因で北朝は滅びたのである。よって、渡来する前は異教崇拝だった、もしくは特定の信仰は無かった。しかし、自らの出自であるヤハウエ信仰のことだけは忘れていなかったと考えると、原始キリスト教徒に改宗することなく、ヤハウエ信仰の物部氏にそのまま婿入りできる。

よって、尾張氏が「アロンの杖」を持っており、そこに真沸流が「マナの壺」を持ってきたと考えるのが自然である。そして、婿入りの印として、もう1つの尾張氏である海部氏に「マナの壺」を託したのであろう。

また、「マナの壺」は失われた十支族の中のガド族が継承した、という言い伝えがある。ガド族に、ヘブライ語で～出身という意味である「ミ」を付けると、「ミガド」すなわち「ミカド＝帝」であり、天皇のことである。

よって、真沸流はガド族出身であり、「マナの壺」を持っていたので騎馬民族の大王たることができた。そして、古代物部王朝に婿入りし、最初の天皇“応神天皇”となったのである！それ故、応神に続く天皇陵は、巨大な「マナの壺」の形をしているのである。日本の氏族の出自を記した「新選姓氏録」の序文には、“真人は是、皇別の上氏なり”とあり、天皇の姓は“真氏”であるとしてい

る！天皇家にも姓があったのである。また、真氏の筆頭は息長真人（オキナガノマヒト）であり、“誉田（ホムダ）天皇より出づ”とある。誉田天皇とは、第15代応神天皇のことである。つまり、応神天皇は真氏であり、それ以前の天皇は架空ということになる。

神武天皇の東征を思い出してみると、豊国の宇沙（大分県宇佐市）を経て筑紫へ。それから瀬戸内海沿いに東上して、安芸の国（広島県辺り）と吉備（岡山県）、浪速（なみはや＝難波）と進み、河内国（大阪府）の青雲の白肩津（しらかたつ）という川原に停泊した。九州生まれの第15代応神天皇も、まったく同じ経路を辿って畿内に入り、大和朝廷を開くのである。神話に於ける“生まれ”とは、“その国に初めて登場した”という意味もある。応神天皇が九州生まれなのは、九州に来てから天皇となった、ということの意味する。

また、神武天皇の倭風諡号は始馭天下之天皇（ハツクニシラススメラミコト）であった。それと同名の倭風諡号を持つ天皇として、御肇国天皇（ハツクニシラススメラミコト）＝崇神天皇（第10代）＝御間城入彦五十瓊殖天皇（ミマキイリビコイニエノスメラミコト）が居る。崇神天皇は、応神天皇と同じ伽耶（加羅、伽羅）から渡来したとある。記紀では半島の任那から渡来したことになっているが、任那という国は存在せず、実は伽耶のことを記紀では任那と言っているに過ぎない。任＝大王、那＝国、キ＝城であり、「ミマキイリ＝大王の城から来た」という意味である。

そして、神々の名前の漢字は当て字であるが故に、ほとんど意味は無い。よって、“読み”が重要となる。神武や崇神の話はあまりにも神話的であるから、神と見なして「多次元同時存在の法則」を適用すると、神武と崇神は同一人物となる。そして、漢風諡号でも、「神」という字が共通で使われていることから、“神話として扱って良い”ということである。応神天皇にも「神」があるが、応神は最初の天皇で「現人神（あらひとがみ）」、すなわち、半分は神であるから例外として扱うことができ、神武、崇神と同一視することができる。

また、神武が熊野で救われた神剣「布都（フツ）御魂」は石上神宮に「布都御魂大神」として祀られている。そして、石上神宮には、天孫一族ニギハヤヒが携えてきた十種神宝が「布留（フル）御魂大神」として祀られている。「多次元同時存在の法則」より、神武＝フツ＝ニギハヤヒ＝フル＝沸流＝応神となる。

実際、神武は天皇になるまでの話し、崇神は天皇になってからの話ししか無いと言って良く、2人合わせて1人の天皇、といった感がある。そして、神武－崇神－応神の3天皇は、古代天皇の中で、別格的に扱われているのである。

では、何故、沸流が天皇となり得たのか。婿入りしてヤハウエ信仰となった真沸流大王は、アークを持っていた秦氏を呼び寄せた。ヤハウエ信仰とあれば、アークが必要だからである。秦氏の渡来は一度だけではなく、数回にわたった。真沸流は現在の大分県、宇佐にあたる地方に「豊国」という秦氏の王国を造り、そこに宇佐八幡宮を建立した。“八幡”とは“やはた”とも読み、やはた＝イヤハダ＝イエフダー＝ユダヤであり、ヤハウエなのである。そして、そこから東

征して行った。その途中（か最初かは未確定であるが）、真沸流の前に、何と、イエスが降臨し、「私は在りて在る者」と言われたのである！ヤハウエが降臨する際に言っていたのと同じ、あの言葉である。（「八咫鳥」がそう言っているわけだから、とりあえず、それに準じる現象が起きた、と考えよう。）

真沸流は、ヤハウエとエルサレム教団の秦氏が信仰していたイエスが同一神であることが解ったのである。そして、イエスがこの大王の前に降臨して王権を授けた。それ以来、大王は秦氏から洗礼（バプテスマ）を受けて原始キリスト教徒となり、応神天皇となった。応神とは、神＝イエスに応じる、ということである。天皇とは、正式には“天皇陛下”であり、天の皇帝＝神の預言を梯子の下で聴く預言者、という意味である。

実は、これは聖書で預言されていたことである！ヨハネによる福音書第10章15～16節に、次のようなイエスの言葉がある。

“私には、この囲いに入っていない他の羊もいる。その羊も導かねばならない。その羊も私の声を聞き分ける。こうして羊は1人の羊飼いに導かれて1つの群れになる。”

“この囲いに入っていない他の羊”とは、失われた十支族のことである。“その羊も私の声を聞き分ける”とは、イエスが降臨した際に、イエスであることを認めることである。“1人の羊飼い”とはガド族出身の天皇のことであり、それに“導かれて1つの群れになる”とは、天皇を中心とした国家を形成するということである。

また、真沸流が洗礼を受けた証拠が、宇佐神宮社伝にある。“三角（みすみ）池の笹の上に光り輝く3歳の童子が現れ、我は16代誉田天皇広幡麿（ホムダスメラミコトヒロハタマロ）と名乗り、黄金の鷹となった”とある。三角池とは薦（こも）八幡宮境内にある薦池（こものいけ）のことで、三角形の池である。角＝コルン＝光という意味があり、3つの角の池とは、3本の光り輝く柱のある池、という意味になり、「生命の樹」の3本の柱（＝絶対三神）が存在する池となる。「生命の樹」の奥義はイエスが示した。実際、池の中に鳥居が建っているが、故あって、2本の柱である。

実は、3本柱の鳥居、三柱（みはしら）鳥居を有する神社が京都の太秦の近くにある。「木嶋坐天照御魂（このしまにいますあまてるみたま）神社」、通称「蚕の社」と言われている神社であり、主祭神は天之御中主神＝ヤハウエである！ここは、秦氏が創建した。蚕は絹の原料、秦氏は織物の「機（はた）」だと言われるぐらい、機織りが有名だった。（「服部」という姓は、「機織り」に由来する。）そして、三柱鳥居は、「元糺の森」と言われている小さな森の中、水の中に建っているのである！「元」なのだから、現在は別の場所に「糺の森」はある。

それは、裏神道の総本山、すべての神社の総元締めである下鴨神社である！境内には御手洗（みたらし）の池がある。土用の丑の日に御手洗池の中に足をひたせば、罪、穢れを祓い、疫病、安産にも効き目があると言われており、毎年、土用の丑の日に御手洗池に祀られている御手洗社で「足つけ神事」が行わ

れる。つまり、現在のバプテスマである。なお、ここには三柱鳥居は無いが、代わりに“3 本足の八咫鳥の神＝賀茂建角身命”が主祭神である。(近くには、「御手洗」由来の「賀茂みたらし団子」を売っている店がある。)

さて、“上に光り輝く 3 歳の童子が現れ、我は 16 代誉田天皇広幡麿 (ホムダスメラミコトヒロハタマロ) と名乗り、黄金の鷹となった”のであるが、16 代誉田天皇広幡麿は 15 代応神天皇の諡号“誉田天皇”のことである。広幡＝幡＝幡＝八幡＝応神である。そして、八幡神の象徴は鳩である。イエスが洗礼された場面を思い出すと、“聖霊が鳩のように舞い降りて祝福した。”故に、鳩が八幡神の象徴である。(「八」は鳩が向かい合っている形。)

そして、宇佐八幡宮に関する最も古い資料「太政官符」には“八幡大神が鷹の姿をして現れた。ところが、御心が大変荒々しかった。人が 5 人行けば 3 人を殺し、10 人行けば 5 人を殺した”とある。これは、“黄金の鷹となった”に対応しており、このような荒々しい神は、契約を守らなかった者に必ず罰を与えたヤハウエであるから、ヤハウエ＝八幡神である。ヤハウエの「ヤ」が八幡 (やはた) の「や」で、「神」を表す。

このように、宇佐八幡宮は“本当の初代天皇”が建立したことから、皇室の第二の祖廟なのである。

こうしてイエスから王権を授かり、洗礼を受けた時点で、応神天皇は秦氏の携えているアークを手中に収めた。そして、婿入り先の物部氏は応神天皇に従った。イエスが各地に現れ、応神天皇に聖霊が降るのを見たからである。

しかし、畿内の物部氏 (海部氏＝尾張氏支配下) は“自分たちは裏切られた”と思い込み、信仰を捨てた応神天皇に対して反乱を企てた。三種の神器の内の 2 つを保持する畿内では (おそらくこの時点で、「マナの壺」は籠神社にあったのだろう)、旧約の神ヤハウエを唯一の神とする強い信仰があったからである。

しかし、戦闘の最中に、天からイエス＝ヤハウエが光り輝きながら降臨した為、古い旧約の神は新しい新約の神に全権を譲ることになった。

すなわち、神武東征伝説に於ける「八咫鳥」の導きとは、真沸流を原始キリスト教に改宗させたエルサレム教団の秦氏のことであり、勝利をもたらした、光り輝く「金鷄」とは、光り輝きながら降臨したイエス＝ヤハウエのことである。

こうして応神天皇は「契約の箱アークと十戒石板」「マナの壺」「アロンの杖」を手中に収め、イスラエル十二支族を象徴するヘブライ語“ヤマトウ”に因んで、大和朝廷を開いたのである。よって、応神以前は架空の天皇であり、応神天皇＝天皇家は祭司一族ではないから、三種の神器を直接扱うことはできないのである。

これで、ヤハウエ＝イエス＝天之御中主神＝天照大神となった。つまり、神道とは、天照大神＝イエス・キリストを唯一神とする絶対神崇拝なのである！

以後、天皇家は代々天孫降臨の奥義を伝えるために大嘗（だいじょう）祭を行ってきた。大嘗祭とは、新しく天皇となる儀式であり、即位の礼が表向きの儀式に対して、大嘗祭は天皇家秘伝の裏の儀式である。毎年、勤労感謝の日に行われているのが新嘗（にいなめ）祭であり、その年の収穫に感謝する儀式であるが、大嘗祭は、その特別なものである。

大嘗祭では、まず天皇となる前の皇太子が禊ぎ＝バプテスマを行う。その後、鹿服（あらたえ）という白装束、すなわち“死に装束”を着用して儀式を進行する。（鹿服は、代々、阿波の忌部氏が制作することになっている。阿波忌部氏の家系で有名なのが、三木元総理である。）そして、天照大神と共に食事をし、御襖（おふすま）と言われる寝床に横になり、また起き上がる。

すなわち、大嘗祭とは“最後の晚餐”“死”“復活”を再現することによりイエス・キリストの霊と一体となり、正式に王権を継承する儀式である！そして、天照大神は男神であるから、天皇は男性でなければならないのであり、これこそが“男系万世一系”の真相である。

天皇陛下は、勿論これらのことをご承知である。しかし、イエスの国仕掛けの命により、日本の存在を世界の目から隠すため、すべてを封印したのである。秦氏によって。（以後、秦氏とは、純系エルサレム教団の事を指す。）

ただし、聖書の使徒言行録第1章11節では、イエスが昇天する際に傍らに居た天使はこう言った。

“ガリラヤの人たち、何故、天を見上げて立っているのか。あなた方から離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなた方が見たのと同じ有様で、またおいでになる。”

と、イエスの再臨を預言している！そして、磔刑後に復活したイエスは弟子たちに言った。

“私について、モーゼの律法と預言者の書と詩篇に書かれていることは、すべて実現する。”

よって、成された封印は、イエス再臨の時＝最後の審判が近づけば、解かれるのである。

#### (4)陰陽道とカッパーラ

このように、日本こそがイエス本来の教えを受け継ぐキリスト教なのだから、何も、神道などという宗教を創設して封印する必要は無かったはずである。しかし現実には、キリスト教はおろか、天照大神＝イエス＝ヤハウエということすら、封印されているのである。それは、前述のイエスの預言成就のためでもあるが、もう1つ、秦氏が持ってきたイエスに由来する物と大いに関係がある。これについては後述するので、まずは、その封印方法を見てみよう。封印とは、完全に隠すことではない。どこかにヒントがあり、見る人が見れば解るのであ

る。その封印方法が「カッパーラ（迦波羅）」である。

日本のカッパーラの元は陰陽道である。陰陽道とは、この世の森羅万象はすべて陰と陽のバランスからなる、という考えである。日本に於ける陰陽道は、中国の道教がベースであるが、それとは異なる。ヒンズー教や道教の考えを基に、日本独自のものとしていったのが日本の陰陽道である。これが言うなれば表の陰陽道であり、その使い手を陰陽師（おんみょうじ）と言う。宮中では陰陽頭（おんみょうのかみ）と言われる陰陽道の統括者が、天体観測や風水によって、物事の吉凶を判断したのである。

これに対して、カッパーラとは「裏の陰陽道」とも言えるものである。それは、基本は陰陽道であるが、そこにイエスが明らかにした「生命の樹」を根元とするカッパーラを加え、独自の体系を形成するものである。イエスのカッパーラとは、

【峻巖の柱：聖霊ルーハ、均衡の柱：御父エロヒム、慈悲の柱：御子ヤハウエ＝イエス】

であり、人形（ひとがた）「アダム・カドモン」から、「合わせ鏡」の奥義によって読み解かなければならない、というものであった。更にここに、数字、漢字などの文字、言葉の音（おん）、凶形などにいろいろな意味を込めて組み合わせたもの（＝象徴）の総体系がカッパーラであり、その使い手を漢波羅（かんばら）と言う。大は小の中に、小は大の中に隠し、両者は表裏一体となり、霞の中に消え去ることを極意とする。

例えば、五芒星は悪魔封じや魔除けの象徴であり、陰陽道では安倍清明に因んでセーマンと言う。陰陽道では奇数が陽、偶数が陰と考える。これがカッパーラでは 1 を足した六芒星となり、表と裏で陽と陰を成す。なお、清明と陰陽道で対決した蘆屋（秦）道満に因んだ九字（くじ）も奇数であるから、清明と道満の対決は陽対陰ではない。そして、九字の裏が十字（架）である。

そのカッパーラを含めた日本の陰陽道の創設者が聖徳太子である。聖徳太子の補佐をしたのが、秦河勝、秦氏であり、聖徳太子が秦氏により陰陽師を形成し、万世一系の天皇主義の根幹を樹立した。それは、次のようなものである。（聖徳太子自身、いろいろな象徴が多く、架空の人物である可能性がある。これについては後述する。）

- ・基本となる陰陽師（漢波羅）は 12 人であり、十二支族、イエスの 12 人の使徒に由来する。当然、エルサレム教団＝秦氏である。この組織を「八咫鳥」と言う。“鳥（からす）”は鳥（とり）だから、“鳥（とり）”が象徴である。八咫鳥こそ、応神天皇を改宗させ、祭祀を一手に担ってきた秦氏の中の祭司一族、“秦氏の中の秦氏”である。よって、鳥は秦氏の象徴でもある。
- ・その中の中核の 3 人を「大鳥（おおがらす）」と言う。3 人とは、いつもイエスが特別に扱ったペトロ、ヤコブ、ヨハネであり、且つ「生命の樹」の 3 本

の柱を表す。そして、3人の大鳥で「金鵄」を構成する。天照大神と高御産巢日神が遣わした3本足の大きな鳥が「八咫鳥」であった。高御産巢日神は「慈悲の柱」であり、天照大神＝イエスであるから天照大神も「慈悲の柱」となり、イエス＝天照大神＝高御産巢日神なのである。

- ・「金鵄」こそ、宮中祭祀の奥義を知り尽くし、すべての神社を裏から取り仕切っている裏神道の天皇、裏天皇である。神武東征伝説に於いて八咫鳥と金鵄が勝利をもたらしたのは、このことを意味し、天皇と裏天皇が表裏一体ということを表している。そもそも大嘗祭では、奥義を伝えるべき天皇は“お隠れになって”存在しないのだから、誰が皇太子にその奥義を伝えるのか、考えてみればその矛盾にすぐ気づく。
- ・表向きの神道（＝八百万の神々、陰陽道）に対する裏の神道（＝唯一絶対神、カッパーラ）の総本山は下鴨神社である。下鴨神社の主祭神は賀茂氏の祖、賀茂建角身命＝八咫鳥命である。よって、下鴨神社にバプテスマ用の糺の森があり、賀茂氏こそ、八咫鳥である。

以下、具体例を示す。

<数字>

- ・意味：根幹はユダヤのカッパーラ数秘術。

- 1：唯一絶対神。天之御中主神。一つ巴紋。唯一絶対神とは、人間に関わる神＝イエス＝ヤハウエを表す。
- 2：「合わせ鏡」の同一神を表す。二つ巴紋。
- 3：「生命の樹」。三柱の神＝絶対三神で唯一絶対神を構成する。三つ巴紋。
- 4：神の戦車メルカバー。流出世界、創造世界、形成世界、活動世界の四界。4本の柱。YHWHのテトラグラマトン。
- 5：五芒星（セーマン、ソロモンの星）。悪魔封じ、魔除け。
- 6：六芒星（ダビデの星）。2つの三角形が天と地を向き、調和していることを表す。7が神の数字であるから、それより1少ない6は人間を表す。
- 7：神の数字。三柱の神がメルカバーで囲まれている。7日間で天地創造。オリオン座。（三ツ星が4つの星で囲まれている。）
- 8：7の裏となり救世主。元々は太古の地球に君臨したシュメールの大神アヌの象徴。
- 9：「生命の樹」の三柱（神）三界。
- 10：イエスが磔刑に処せられた十字架。10個のセフィロト。
- 11：ダアトも含めたセフィロトの数。
- 12：十二支族、12人の使徒。
- 13：ダアト＝知識の門＝神界の前に達する7個のセフィロトと6個のパスを合わせて13で、完全数。12人の使徒とイエス。

・七五三

神世七代での三柱、五柱、七代で「七五三」を形成する。「七五三」とは、神による国造りを人間の成長段階に当てはめたもの。また、「生命の樹」の配列である縦3列、横3列から成る魔法陣（ゲマトリア）が形成される。

4	9	2
3	5	7
8	1	6

縦、横、斜め、いずれの和も15となり、15は $1+5=6$ 、すなわち、人間を表す。

この升目を線で区切ると、漢字の「囿」となり、閉じた宇宙を表す。

中心は5なので、表の神道では5が最も重要となる。（鯉のぼりの吹き流し、五色の短冊、五色の旗など。また、手足の指は5本、五体満足。人間の遺伝子は5個の塩基で構成される。5の神秘性は、遺伝子由来のものか？）

ゲマトリア内の奇数＝陽数を結ぶと“十字”となり、聖十字架の象徴である！そして、 $9\rightarrow7\rightarrow5\rightarrow3\rightarrow1$ のZ型のジグザグはヤハウエの象徴である雷を、Zはイエス自身を指す最後の文字（オメガ）を表す。

<漢字>

日本の漢字は中国のものとは異なるものが多い。これは、漢字の表意性にカバーラで意味を封じ込めたため。「漢字破字法」で解説する。

・天皇陛下

天皇は天＋皇。（下上）賀茂神社では、「天」は下の棒を長く書き、書き順も工→人である。そして、更に分解して工＋人＋白＋王。

大工（石工）である人は、白く光り輝く王である、という意味。すなわち、イエス・キリストのこと。

陛下とは、神とを繋ぐ梯子（ヤコブの梯子、天橋立）の下で、神に仕える預言者のこと。

・天照大神

天照大神とは、工＋人＋日＋召＋火＋一＋人＋神。太陽の輝き（火）を持つ唯一の神に召された、光り輝く大工。すなわち、イエス・キリストのこと。

・山

三柱、すなわち、絶対三神と「生命の樹」を表す。原型はピラミッド。

・秦

秦は三＋人＋ノ＋木。つまり、三柱の「生命の樹」である。

・大酒神社

大酒の元字は大辟（だいびやく）で、意味は“死刑”で、イエスの磔刑。同音で別の字では大關。この字は、中国ではダビデの意味。

<言葉の音、読み>

・秦氏、八幡、機物

はた＝イヤハダ＝イエフダー＝ユダヤ。それとは別に、大阪に機物（はたもの）神社がある。機物とは、織物などではなく、“磔刑用の木材”のことで、つまり十字架のこと。“生贄”という意味までである。

秦氏の“はた”には、十字架の意味まで込められている。

・イエス

イエス・キリストをヘブライ語ではヨシュア・メシアッハ、アラム語ではイシュ・マシャ、メソポタミア東部やインドではイズ・マシと言う。イズは日本語ではウズとなる。

太秦はヘブライ語で“ウズ＝光”“マサ＝賜”と同時に、イエスのことも指す。元々、イエスは光り輝く日の神なのである。弓月君は大酒神社では“ゆんずのきみ”と読まれているが、“光の君＝光の王＝イエス”ということ。

・天宇受売命（アメノウズメノミコト）

“ウズメ”に注目する。ウズ＝イエス、メ＝女だから、イエスの女＝妻！また、天宇受売命は猿田彦の妻となった。「多次元同時存在の法則」から猿田彦＝天照大神＝イエスであり、猿田彦は天宇受売命と結婚後、宇豆彦（ウズヒコ）とも呼ばれるようになった。ここからも、宇豆＝ウズ＝イエスであり、天宇受売命はイエスの妻だったのである！

そして、天宇受売命のモデルはマグダラのマリアだったから、イエスとマグダラのマリアは結婚していたことになる！！天宇受売命と猿田彦は猿女君の祖となり、猿女君は神楽→猿楽→能楽の祖である。神楽を舞うのは神に仕える女性、巫女であり、男神と一体となる女性である！！

よって、イエスは神殿の巫女であるマグダラのマリアと結婚した、と日本の神話に書かれているのである！！（ダヴィンチも真っ青な、見事な仕掛けである。脱帽だ。）

ただし、その子孫も秦氏となって渡来し、能楽の祖である観阿弥、世阿弥の子孫となった、という保証は無いが、その可能性は、無きにしも非ず。

・イザナギ、イザナミ

アダムとイブの話では、アダムはイシュ、イブはイシャーだった。これが転じて“イザ”となる。また、インドの蛇神ナーガとナーギが転じてナギ、ナミ。合わせて「イザナギ」と「イザナミ」である。

・草薙の剣

草はくさかんむり＋日＋十。くさかんむりの元字は“艸”であり、「合わせ鏡」

の三柱であり、唯一絶対神＝イエス＝ヤハウエを表す。

よって、“草”は日の神であるイエスが十字架に掛けられた、ということ。

薙はインドの蛇神ナーギで、八岐大蛇から出てきたことも蛇と関係する。毒の無い蛇は、イエスの象徴だった。よって、“草薙”で十字架に掛けられたイエスのこと。

<図形>

図形こそ、象徴の中の象徴である。

・メノラー (<http://dateiwao-id.hp.infoseek.co.jp/nazomenora.htm>)

ユダヤの燭台。7つの枝分かれにアーモンドの花10個がセフィロト、それぞれの柱にある節22個がパスを表す。すなわち、「生命の樹」そのものである。

・御札、護符、熨斗

神社などで戴く御札や祝儀袋の右上に付いている熨斗の形は、アダム・カドモンである。御札を開くと罰が当たるというのは、安易にカッパーラに近づいてはならない、ということである。伊勢神宮の護符には“蘇民将来”とあるが（現在は「天照大神」に変更されている）、将来この国の民は蘇る、すなわち、ヘブライの奥義が無数に隠されていることに気づくということ。

・平安京

長安がモデルではあるが、実は人形なのである。となれば、当然、アダム・カドモンがモデルである。秦氏に造詣が深い太秦と吉田神社は都大路から外してある。それを示しているのが、明日香の酒船石である。石の両側が“わざと”破壊されている。酒船石については、以下のページ参照。

<http://www.asukanet.gr.jp/ASUKA2/ASUKAISI/sakafuneisi.html>

そして、最も重要なセフィラであるティファレトの位置に御所がある。また、平安京をアラム語でいうと“エル・シャローム”である。極東のエルサレムである。桓武天皇が平安京完成にあたり、新しい都の名前をどうしようかと考えていたところ、民衆の間から自然とエル・シャロームという歓声が上がっていた。それに因んで、平安京とした。

平安京と秦氏の関係を探る上での重要な歌がある。

“明日香なる 平安結ぶ雛形の 最も古き男（おのこ）よ いずこ”

明日香＝飛鳥でのカッパーラの象徴は酒船石のことである。“明日香なる 平安結ぶ雛形の”とは、明日香に存在する平安京のモデルとなっている雛形のこと。つまり、酒船石のこと。“最も古き男”とは、人類の祖であるアダムのこと。すなわち、この歌は次のことを意味する。

“明日香に存在する、平安京のモデルとなっている雛形＝酒船石の中に、人類の祖であるアダムはどのように隠されているのか？”

という謎解きである。これに対する答えは、次のようになる。

酒船石はアダム・カドモンそのものであり、従って、平安京もアダム・カドモンである。最も重要なセフィラであるティファレトの位置に大内裏があり、頭部は北の船岡山が相当する。船岡山は風水（陰陽道、カッパーラ）では北神の玄武の位置に相当する。しかし、酒船石は両手に当たる部分が欠損している。当時の平安京見取り図では、長方形と正方形の区分が存在する。長方形の部分が大部分であり、それを塗りつぶしていくと、人形（ひとがた）が浮かび上がる。だが、そこには吉田神社や太秦など、秦氏関連の重要な箇所が含まれていない。これらの部分が、酒船石の欠損している部分に当たる。事実、吉田神社や太秦まで都大路が存在していたことが判明している。

すなわち、酒船石で平安京がアダム・カドモンを雛形としていることを示唆し、且つ“意図的に”両手に当たる部分を欠損させることにより、平安京建設以後、秦氏自らがカッパーラと化し、歴史の闇に隠れていったことを意味する。そして、後世の解き明かしのために、酒船石を残したのである。

また、“雛”には三叉（卍）が一对あり、「合わせ鏡」の三柱の神を象徴していることは、言うまでもない。

なお、平安京については数々の秘密が隠されているので、詳細は巻末に記載する。

#### ・門松

「生命の樹」の3本の柱そのもの。向かい合わせで、「合わせ鏡」の同一神を表し、10個の竹の節は「生命の樹」のセフィロトを表す。

#### ・家紋

家紋のルーツはシュメールである。巴紋は前述の通り。

菊の御紋（十六弁八重表菊紋）は、 $1+6=7$ の裏であり救世主を表す8が、表と裏で合わさり、表裏一体であることを表す。

桐の御紋は、3本の幹と3枚の葉で三神三界＝「生命の樹」を表し、真ん中の7つの枝分かれが、ユダヤの燭台メノラー＝「生命の樹」を表す。

（熱田神宮には、通常の本の御紋の下に5枚の笹の葉がある紋が多く見られる。5を加えて、七五三も表している。）

三つ葉葵の御紋は、3本の幹と3枚の葉で三神三界＝「生命の樹」を表し、それが丸＝蛇の目＝絶対神（イエス）の目の中にあることを表す。

現在、天皇家の正式な紋章は十六弁八重表菊紋である。これは、古代では裏の紋であり、五七の桐の御紋が正式だったようである。それは、十六弁八重表菊紋がメソポタミアなどで多く見られ、主の象徴であることから、秘中の秘だった。

ところが、日本でもユダヤのような南北朝時代から、南朝が正式な御紋として使いだした。その時の裏の御紋が十二紋菊である。これは、イエスの12人の使徒に由来し、且つイスラエルの十二支族を象徴している。後南朝の末裔の家

紋は十二紋菊で、現在でも皇室から手厚い保護を受けているようである。そして彼らは、天の岩戸開きは海外での出来事がモデルであり、アマテラスが男神であることも知っているようである。

この十二紋菊が堂々と掲げられている場所がある。明治神宮である。つまり、明治天皇が南朝であるということ象徴している

- ・雷神

雷はヤハウエと「生命の樹」の稲妻カブ。背負う 10 個の太鼓は「生命の樹」の 10 個のセフィロトを表し、太鼓の柄の三つ巴は三柱の絶対三神を表す。

- ・伊勢神宮の外宮と内宮に於ける正殿の配置

いずれも正殿は南向きで、四重の垣根＝メルカバーに囲まれている。外宮は正殿の手前に西宝殿と東宝殿があり、これらで北向きの三角形を形成する。

対して、内宮は正殿の後ろに西宝殿と東宝殿があり、南向きの三角形を形成する。そして、両者の三角形が「合わせ鏡」で六芒星を形成する。

- ・神主の烏帽子、丁髷（ちょんまげ）

八咫鳥そのもの。

### <神輿、神社の社（やしろ）>

神輿の起源は、東大寺の大仏建立の際、宇佐八幡宮から八幡神が東大寺へ巡幸したが、その際、八幡神の御座として使われた紫の鳳輦（ほうれん）である。東大寺を開山した初代別当は良弁（ろうべん）であるが、その父の名は秦常満であり、秦氏である。よって、神輿も秦氏に関係がある。

実は、共に「契約の箱アーク」を象ったものである！アークはアカシア製の神輿のような箱であり、移動の際には、下部にある黄金の輪に木を通し、ラッパなどを鳴らしながら、威勢良く担がなければならなかった。神輿を担ぐ際の掛け声は「ワッショイ、ワッショイ」である。古代朝鮮半島の似たような言葉で「ワッソイ、ワッソイ」というのがあり、それは「来ました、来ました」という意味である。よって、「ワッショイ、ワッショイ」とは、「神輿＝アークが来ました、アークが来ました」という意味である。

大きさも神輿ほどで、上には黄金製の天使ケルビムが向かい合い、羽を合わせて、主が降臨するための贖いの座を形成している。ケルビムの代わりに鳳凰としたのが神輿であり、千木（ちぎ）としたのが神社の社である。なお、京都の秦氏の総本山、松尾大社などでは、神輿も鳳凰ではなく千木である。

### <相撲>

相撲は国技＝神技であり、決してスポーツなどではない。元々は神社で行われており、そのため、行司は神主の格好をしている。

由来は、ヤコブ＝イスラエルが天使と格闘していた、あの話しである。現に、神社によっては、“独り相撲”なる神事を行うところもある。相手が神だと、見えないからである。それに、相撲の稽古では柱を相手にしてぶつかる。柱は神

を表すから、神を相手に稽古しているのである。

土俵は四角に丸で、蛇の目＝イエスの目。上にある三角の社との間から、絶対神の目が覗く。まわしは注連縄で、ヤハウエの降臨。そして、それを腰に巻いて円となるから、これも蛇の目。

太刀持ちと露払いを加えた3人の力士は、三柱の神＝「生命の樹」。東西の三役が並び立つ形は、「合わせ鏡」で見れば六芒星。

#### <闇の神道>

いわゆる“闇の陰陽道”をベースとした呪いを主体とし、「死の樹」である。典型的な例が丑の刻参りである。これは、次のように行う。

“白装束で1枚歯の下駄を履き、頭には真ん中を高くした3本の蠟燭を刺した鉄輪を被り、鏡をぶら下げ、丑の刻に神社に行く。そして、境内の御神木に呪いを掛けたい人の藁人形を、鏡に映しながら打ち付ける。藁人形は十字架型で、手に1ヶ所ずつ、足に1ヶ所、合計3ヶ所に五寸釘を打ち込みながら、呪いを掛ける。他人に見られてはならず、7日間行う。”

- ・白装束：死に装束。
- ・1枚歯の下駄：唯一絶対神。
- ・真ん中を高くした3本の蠟燭：生命の樹。
- ・輪：蛇の目＝イエスの目。被ることは茨の冠。
- ・御神木：榊。十字架。
- ・藁人形：アダム・カドモン。
- ・鏡：呪いの人形は御神木に打ち付けるから、鏡に映った時点でイエスとなる。
- ・釘を打ち付ける位置：イエスの磔刑と同じ位置。
- ・7日間：神聖数字7。天地創造の7日間。

つまり、呪いの生け贄として、イエスを十字架に打ち付けることを再現している。五寸釘の5は悪魔払いや魔除けの5であり、「合わせ鏡」で呪いを行っているから、結局、その呪いは呪いを行っている悪魔＝本人に返ってくる。

なお、カッパーラの根源はユダヤ教である。それが欧米に広がり、カバラ数秘術などとなっている。しかし、それらは暗黒のカバラ、黒魔術であり、「死の樹」である。対して、日本のカッパーラは光のカバラである。

#### <日本神話>

ここまでに述べたカッパーラを駆使し、主に聖書を基に創作したのが日本神話（古事記、日本書紀）である。

神世七代は、創世記に於いて7日間で天地創造が終わったことに対応している。

イザナギとイザナミが天御柱の周りを回ったのは、中国の伏羲と女媧がモデルである。

天の岩戸隠れと岩戸開きは、イエスの磔刑の場面である。重要なのは、天照

大神が、榊に掛けられた八咫鏡に映った自分を他の神と勘違いしている間に、引きずり出されて光が戻り、もう二度と隠れることがないよう、天太玉命が注連縄を張った場面である。

天照大神は神話上では女神だから、八咫鏡に映ったのは「合わせ鏡」の奥義から、男神＝イエスとなる。ならば、八咫鏡が掛けられていた榊は十字架であり、且つ「生命の樹」である。「榊」という言葉は「神の木」であるが、「さかき＝逆木」であり、ここでも「合わせ鏡」で逆に見よ、ということを示唆している。“木”という字も、逆さにすると3本の柱となり、「生命の樹」を表す。

そして、八咫鏡を榊に掛けたのは天太玉命、祝詞（祈りの言葉）をあげていたのは天兒屋根命であり、祭司一族である！祭司一族は預言を成就するために、刑の進行を見守っていたのである。人の生死に関わる儀式ができるのは、祭司一族だけであった。よって、榊を準備し、鏡を掛けて奥義を象徴し、岩戸に注連縄を張って封印した天太玉命は祭司一族の中の祭司レビである。それ故、天太玉命の流れを汲む忌部氏こそ、秦氏の中心を担う祭司一族なのである。

なお、天兒屋根命の流れを汲む中臣氏は、後に表立って天皇と共に政治を司る藤原氏となった。

また、天孫降臨では番能邇邇芸命が久士布留（くじふる）岳に降り立った。これは、伽耶の神話が元である。

“亀旨峰（くじほう）の麓で、天から声が聞こえた。やがて天から紫色の紐が降りてきた。その先端には黄金の櫃が付いていた。そこには、6個の卵が入っていた。その卵が羽化して男子が誕生し、伽耶王朝の始祖である金首露となった。”

よって、久士布留岳の“久士”とは亀旨峰であり、布留＝沸流＝応神天皇である。更に、亀旨＝亀慈で、秦氏の建国した弓月王国があった場所である。

そして、“黄金の櫃”とは「契約の箱アーク」のことである。“黄金の櫃”伝説は新羅など朝鮮半島全般にわたるものであり、朝鮮半島に“金氏”が多いのも、その伝説に因んでいる。

また、玉依姫の「丹塗り矢伝説」は、玉依姫が物部氏で、そこに婿入りした応神天皇の話のいろいろ変えて書いているのである。

#### <聖徳太子>

最後に、日本に於けるカッパーラ（陰陽道）の創設者、聖徳太子について。聖徳太子は、イエスをモデルとした架空の人物であると推定される。その理由は、次の通りである。

- ①あまりにも人間離れした逸話が多い。
- ②厩戸皇子という名前がイエスを連想させる。
- ③広隆寺では五芒星が聖徳太子の象徴であり、大工の神である。  
イエスは大工の息子で、歪んだヤハウエ信仰を神殿で諫めた。

- 神殿は、最初にソロモンが建設した。ソロモンの象徴は五芒星である。
- ④法隆寺の夢殿は八角形であり、ベツレヘムの星＝イエスの象徴である。
  - ⑤17条の憲法は、カッパーラでは $1+7=8$ ＝救世主の象徴である。
  - ⑥冠位12階は、12人の使徒と同時にイスラエルの十二支族を象徴する。
  - ⑦四天王寺の四は、神の戦車メルカバー、テトラグラマトンに対応する。  
これは、YHWHの象徴である。
  - ⑧聖徳太子を補佐したのは秦河勝で、秦氏＝原始キリスト教の中心人物である。

原始キリスト教では、イエス＝ヤハウエである。よって、④⑤⑥と⑦は辻褃が合う。

更に、蘇我馬子と物部守屋も架空の人物と推定される。彼らは最重要人物であるにも関わらず、親以前の系図が定かではない。聖徳太子は馬子と組んで、守屋を滅ぼした。物部氏は(歪んだ)ヤハウエ信仰であった。また、ユダヤの神殿があった場所はモリヤの丘であった。

よって、聖徳太子が物部守屋を滅ぼした、ということは、歪んだヤハウエ信仰をイエスが神殿で諫めた、ということと同時に、物部氏のヤハウエ信仰を秦氏が原始キリスト教に改宗させた、ということの意味する。

蘇我馬子は“我、馬屋戸＝厩の子として蘇る”という漢字のカッパーラで、厩戸皇子と同一である。これでは漢文の読み方として間違いだ、と言うかもしれないが、“蘇民将来”＝“(この国の)民は将来、蘇る”と同じであり、“読み”としてのカッパーラである。また、蘇民将来はスサノオに関係するが、カッパーラ的にはスサノオ＝アマテラス＝イエスである。

そうすると、3人セットで架空ということになる。3＝「生命の樹」の3本柱であり、「生命の樹」は原始キリスト教の根幹を成すものである。(くどいようだが、ネストリウス派ではなく、原始キリスト教である。ネストリウス派では、年代的に合わない。ネストリウス派は5世紀の西アジアだが、秦氏は2～3世紀頃には朝鮮半島に存在していた。ネストリウス派は中国語で景教と言われている。景教とは中国語で「光の信仰」という意味である。景教の教会を、唐の時代は「大秦寺」と言った。大秦寺＝広隆寺と同じであるが、それに惑わされてはいけない。)

よって、これら3人の人物は、秦河勝ら秦氏がイエスの教えを基に創作した架空の人物であると判断される。神武天皇などと同様に。系図や物などは、この創作を基に創り出されたものであろう。

あるいは、時の皇子を秦氏が担いで聖徳太子としたのかもしれない。しかし、それはあくまでも表面上のことで、実権は秦河勝ら秦氏が握っていたから、その皇子が17条の憲法や冠位12階の制度を作ったのではない。となれば、たとえ実在の皇子がいたとしても、聖徳太子としての働きは秦氏がしているわけであるから、架空と見なすことと同等である。秦氏は表には出ず、陰で操るのである。

このように、八咫鳥がイエスのカッパーラに従い、国中をカッパーラで徹底

的に封印して今日の日本の基礎を作り上げた。その奥義に不用意に近づこうとした者は、八咫鳥によって闇に葬られた。“通りゃんせ”の歌は、このことを暗示する。そして、カッパーラに囲まれているので、いつしか誰もカッパーラをカッパーラとも思わなくなったのである。

<通りゃんせ>

通りゃんせ 通りゃんせ

ここはどこ細通じゃ 天神さまの細道じゃ

ちっと通して下しゃんせ 御用の無い者通しやせぬ

この子の七つのお祝いに お札を納めに参ります

行きはよいよい 帰りは怖い

怖いながらも通りゃんせ 通りゃんせ

“天神さまの細道”とは、神社の本殿への道。しかし、何故か、その道は細く狭い。神社へは誰しもが参拝できるはずだが、“御用の無い者通しやせぬ”とは、これに矛盾している。

“七つのお祝いに お札を納めに参ります”ということで、七五三のお祝いに行くことが解る。普段着慣れない晴れ着を纏い、御祓いなどを受けたりするから、行きは緊張して怖く、帰りは千歳飴などを貰えて嬉しいはずであるが、“行きはよいよい 帰りは怖い”とは、まったく逆のことを言っている。それに、“帰りは怖い”のに、何故か、“通りゃんせ=通ってみよ”となっている。

このように、この歌は矛盾だらけである。しかし、前述のように、カッパーラ（神道）の奥義に不用意に近づこうとした者は、八咫鳥によって闇に葬られたことを当てはめると、すっきり解釈できる。

神道の奥義に近づくことが、“天神さまの細道”として象徴されている。奥義に近づくためには、聖書など、様々な資料に当たらなければならない。だから、その道は細く狭い。

“天神さまの細道”には、当然、鳥居がある。鳥居は字の如く“鳥”が居る。この“鳥”とは、八咫鳥の象徴である。通常、神社には一の鳥居、二の鳥居など、本殿へ至るまでにいくつかの鳥居がある。これは、神道の奥義に近づこうとする者は、いきなり“本殿”に立ち入ることはできず、何段階かの八咫鳥との問答に堪えなければならない、ということである。つまり、神道の奥義に近づこうとする者以外は用の無い者だから、八咫鳥が“御用の無い者通しやせぬ”ということである。

七五三は「生命の樹」に於ける三神三界のゲマトリア、“お札”はアダム・カドモン、つまり、カッパーラの要とも言うべきものだから、“この子の七つのお祝いに お札を納めに参ります”という表現で、神道の奥義、カッパーラの奥義について八咫鳥の下へ問答しに行くことを象徴する。

問答で敗れた者は、かつては八咫鳥によって闇に葬られたから、“行きはよいよい 帰りは怖い”となる。

このように、神道の奥義に近づくことは極めて難しく、危険なことであるか

ら、それに堪えられる者だけが、それなりの覚悟のある者だけが近づいて来い、ということで、“怖いながらも通じゃんせ 通じゃんせ”となる。

“通じゃんせ”の歌は作者不詳だが、国学者として有名な本居宣長の6代目の子孫、本居長世が作曲していることは象徴的である。

\* 「生命の樹」についての補足

「生命の樹」の奥義は

【峻巖の柱：聖霊ルーハ、均衡の柱：エロヒム、慈悲の柱：ヤハウエ＝イエス】

であり、対応する古事記の神は

【峻巖の柱：神産巢日神、均衡の柱：天之御中主神、慈悲の柱：高御産巢日神】

である。しかし、「多次元同時存在の法則」から、天之御中主神＝ヤハウエ＝イエス＝天照大神＝高御産巢日神となるから、「均衡の柱」と「慈悲の柱」が一致してしまい、矛盾する。この解釈には、歴史を振り返る必要がある。

神社の大元は物部氏のヤハウエ信仰であり、籠神社ではヤハウエを天之御中主神として祀っていた。そして、全国各地の物部氏は自分たちの先祖に絡め、更に自然信仰まで加えて、それぞれに都合の良い名前でヤハウエを祀り上げていた。物部氏は背教により散っていった十支族の末裔であるから、「生命の樹」の奥義は知らず、背教を改心した彼らにとってはヤハウエが唯一神であり、「生命の樹」に示される3本柱の神ではなく、1本柱の神である。

後に秦氏によって神社が改変され、三柱鳥居などに象徴される「生命の樹」の奥義が示された。秦氏は日本神話を創作する際、全国各地では天之御中主神及びその分魂が祀られていたので、それを無視することはできなかった。天之御中主神は「天之御中＝宇宙の中心」であるため、「生命の樹」では中心の「均衡の柱」とせざるを得ない。そのため、最大勢力の物部氏が信仰していた天之御中主神を原初の神としたのである。それにより、「均衡の柱」＝天之御中主神＝ヤハウエ＝イエス＝天照大神＝高御産巢日神＝「慈悲の柱」という矛盾が生じた。天之御中主神を宇宙の中心として「均衡の柱」とするならば、本来は天之御中主神＝エロヒム≠ヤハウエとしなければならないのである。正史である日本書紀では、この矛盾を隠すために、天之御中主神ではなく国常立尊となっている。

つまり、物部氏は「生命の樹」の奥義を知らなかったが故、天之御中主神＝ヤハウエという過ちを犯し、それを引きずっているのである。ただし、「多次元同時存在の法則」に於いては、天之御中主神をヤハウエと見なしているから、天之御中主神の分魂は天照大神の分魂でもある。要は、原初の三柱の神々は、単純に「生命の樹」の3本の柱の象徴と見なせば良いのである。

カッパーラとは象徴であるから、必ずしも“真実”である必要は無く、ある

側面から見た場合の象徴、と見なせば良い。

#### (5) 古事記と日本書紀の編纂、神社の本格的建立

神社は、崇神から応神までの間＝応神の時代が建設ラッシュである。よって、秦氏が関与している。秦氏は、それまでの物部系神社を次々と封印していった。ヤハウエ信仰から絶対三神信仰へと変更するために。

そして、神社の更なる大きな変革は、天武天皇により、古事記と日本書紀の編纂が命じられてから本格的となる。その主導者は、藤原不比等である。

#### ・古事記と日本書紀

天武亡き後の天皇は、女帝の持統天皇（天武の皇后、鸕野讃良、ウノノサアラ）だった。しかし、息子の草壁皇子が若くして亡くなり、孫の軽皇子を文武天皇として即位させることにした。これは、前代未聞のことであった。そのため、女神の天照大神から孫の番能邇邇芸命に降臨が託された、という前例があれば、皇位継承も問題ないと判断されるので、「神」や「神の子＝天子」ではなく、「天孫＝女神の孫」の降臨神話となったのである、というのが天孫降臨神話の通説である。他にもいろいろ説はあるが、いずれにしても、原型が前述の伽耶の神話なので、「天子」から「天孫」へ変更するのは、それなりの大きな理由があるわけである。

また、藤原不比等は鎌足の息子で、背後に聖徳太子がおり、カッパーラに精通していた。そのカッパーラを駆使して、神話による国仕掛けを行った。すなわち、それまでの正史＝物部氏の歴史を封じたのである。691年には、持統天皇（鸕野讃良）が石上神宮など物部系の神社から古文書＝物部氏の歴史書を没収した。そして、国内の16の豪族（物部系）の系図をすべて提出させ、そこに秦氏を絡めて新たな“正史”を創作したのである。いわば、“秦氏による正史乗っ取り”である。

#### ・神社

大和朝廷成立以後、すべての神社の正（しょう）殿は三棟あり、鳥居は三柱鳥居であり、絶対三神の崇拝となっていたが（“秦氏による神社乗っ取り”）、これも藤原不比等により、更なる変革が行われた。絶対三神崇拝を封印し、“八百万の神々”崇拝への移行である。

そのため、鳥居は三柱から二柱に変更された。そして、正殿も一棟とされた。伊勢神宮は「式年遷宮」により、代々、初期の形式を伝承していると思われがちだが、実は外宮、内宮共に、三棟並びの正殿で構成されていたのである！伊勢神宮が三棟並びの正殿構造だった物的証拠として、秦氏の中で経済活動を一手に担っている“三井家（三越などの三井財閥）”が所有する「三井文庫」にその様子を描いた絵「伊勢両宮之図」が存在する。

では、何故イエスの本来の教えを封印し、伊勢神宮の構造まで変更しなければならなかったのか？それは、伊勢神宮に祀られている“御神体”に関係する。その前に、秦氏関連の神社を知る必要がある。

・秦氏三明神

京都の松尾（まつのお、まつお）大社、上賀茂神社、下鴨神社を合わせて秦氏三明神と言う。

松尾大社を創建したのが秦都理（ハタノトリ）なる人物で、歴代の宮司も、秦氏だった。主祭神は「大山咋（オオヤマクイ）神＝火雷神」で、全国の日吉（ひえ）神社の総本山である。そして「丹塗り矢伝説」から、賀茂氏は秦氏であり、松尾大社とは深い関係である。

松尾という言葉があるところ、必ず秦氏が居る。松尾＝秦氏といっても過言ではない。ヘブライ語もしくはアラム語で発酵種を入れないパンのことをマツツォと言う。これが訛ってマツオ、モチとなり、事実、ロシア系ユダヤ人はマツオのことをモチと発音する。（餅の語源。）キリスト教の聖体拝領で使用するパンも種なしパンである。また、12人の使徒の1人にマタイがおり、ヨーロッパではマテオと発音する。そして、松尾大社は酒の神様として崇められている。つまり、松尾大社はパンと酒の神社で、キリスト教の聖体拝領を暗示する！

見学に行ったところ、本殿向かって左側の離れたところに、小さな社が4つあった。向かって右から3つは菊の御紋だが、一番左は何と、徳川の御紋である三つ葉葵だった！この三つ葉葵があるのは、秦氏の祖が祀られている「祖霊社」であることから、秦氏の家紋は三つ葉葵である。三つ葉葵は三神三界＝「生命の樹」が蛇の目＝絶対神の目に封じ込められており、原始キリスト教エルサレム教団の象徴に相応しい。

となると、徳川は秦氏である。（賀茂氏という説もあるが、それも秦氏である。）そのため、江戸を風水＝陰陽道で封印したのである。また、鹿児島島の島津家なども秦氏であるから、徳川の外様大名政策というのは、日本の周辺部を秦氏で固めるということである。（信長なども忌部秦氏である。しかし、調子に乗って、忍者＝秦氏の伊賀を攻撃したことから、本能寺で暗殺された。）

そして、菊の御紋と三つ葉葵が並んでいることから、明治維新後、天皇が江戸城跡に皇居を移したことも納得できる。

なお、鞍馬寺のある鞍馬山の古い名前を実は松尾山と言う。ここは元々毘沙門天を祀り、そこにミトラ＝マイトレーヤ＝イエスを重ねたのが鞍馬の真相である。境内には本殿と共に、光明神殿がある。何故、光明で神殿なのか？イエスを重ねれば、自ずと答えは解るはずである。そして、有名な鞍馬天狗とは、八咫鳥及びその配下のことである。

さて、松尾大社を北上すると、秦氏の拠点である嵐山、そのすぐ東に太秦の広隆寺がある。広隆寺は、陰陽道の祖・聖徳太子とそのブレン・秦河勝が祀られている。境内には「モーゼの十戒」がベースと思われる「聖徳太子の十善戒」があるし、宝殿には国宝第1号の「弥勒菩薩半跏思惟像」がある。弥勒菩薩は釈迦入滅後、56億7千万年後に再臨し、人類を救うと言われている。一説には、地球の人口が56億7千万人に達した時であるとも言われている。「人口説」ならば、そろそろその時期であり、イエスの再臨とも重なる。

また、広隆寺のすぐ東には、大酒（＝大辟＝大關＝ダビデ）神社があり、弓

月君、秦の始皇帝、秦酒公が祀られている。更にその東には、三柱鳥居の「蚕の社」がある。ここには「元紉の森」があり、賀茂神社の「元」であるから、両賀茂神社の社紋、双葉葵があるのは当然である。それと、菊の御紋、三つ葉葵があった。三つ葉葵があるから秦氏であるが、三つ葉から1つ葉を取ったのが双葉である。それが、賀茂神社の社紋とは如何に？

下鴨神社の主祭神は賀茂氏の祖、賀茂建角身命＝八咫鳥命であり、賀茂氏こそ八咫鳥である。そして、下鴨神社は、表の伊勢神宮に対する裏神道の総本山である。賀茂神社について知るには、賀茂神社に関わる有名な祭りの意味を知らなければならない。“葵祭”である。京都で祭りといえば葵祭である。実は、葵祭には松尾大社も参加する。では、葵祭とは何か？

表向きは斎院（伊勢神宮では斎宮）のお輿入れである。それも実は、物部氏の姫と秦氏系の天皇が結婚することを表しているのである。更に、その裏がある。華麗な行列に先立って行われる神事である。下鴨神社で行われるのは御蔭（みかげ）祭、上賀茂神社で行われるのは、御阿礼（みあれ）神事と言う。御蔭とは、光の古語であり、御阿礼とは“御生まれ”のことで、再生・復活を意味する。つまり、下上合わせて、“光が復活する”ということである。

ところで、太陽に向く花といえば向日葵（ひまわり）であるが、“葵”という文字を含む。葵とは、太陽に身を向ける花、のことであり、太陽に向かって傾くことを“葵傾”という。漢字はカッパーラである。よって、神道では葵は“天照大神の花”のことであり、葵祭は天岩戸開き＝イエスの死と復活を象徴するのである！そして、この祭りの原型が、古代の謎を解く鍵の、籠神社の藤祭りである！

賀茂神社の祭司は賀茂氏で、秦氏の中の秦氏、人の死に関する儀式を執り行う祭司一族、忌部氏一族である。古事記では、榊に鏡を掛けた天太玉命の子孫である。その元は、預言成就のためにキリストの磔刑を見守り、復活を手助けた祭司一族、ユダヤの祭司一族コーエン、アロン（モーゼの兄）の系統である。中でも、天皇の儀式一切を執り行うのが賀茂氏である。皇太子が天皇になるためには、即位の礼と大嘗祭が必要である。大嘗祭無くして、天皇たりえない。この大嘗祭の一切を取り仕切るのが、伊勢神宮ではなく下鴨神社であり、八咫鳥である。

鴨がネギを背負ってきた、という言葉がある。鴨肉に葱まで添えてあって、すぐ鴨鍋ができる意から“好都合”の意味である。しかし、本来の意味は違う。このネギは葱ではなく、実は禰宜（神職）である。鴨は賀茂。つまり、全国の神社には賀茂氏の禰宜が派遣されており、賀茂氏の意向には絶対に逆らえない、ということである。全国の神社、皇室の間を往き来する賀茂氏が八咫鳥である。ヤコブの梯子を往き来していたのは羽の生えた天使であり、イエスに聖霊が降りた時、天から鳩が舞って来た。つまり、神と人の間を取り持つのが“鳥”である。鳥居や鴨居が神と人との間の結界を表すのは、そのためである。賀茂氏の“賀茂＝鴨”、八咫鳥の“鳥”はいずれも“鳥”であり、“鳥”は秦氏の象徴＝カッパーラである。

また、両賀茂神社は21年ごとに式年遷宮を行うことと定められている。伊勢

神宮は 20 年で、ほぼ一致している。(現在、賀茂神社の式年遷宮は行われていない。特に、下鴨はすべての社殿が国宝・重要文化財に指定されているため、大修理をもって遷宮と見なしている。) 式年遷宮や齋宮制度は、賀茂神社が起源なのである。

下鴨神社の主な摂社には、河合神社、三井神社、貴布祢神社があり、末社には稲荷社、諏訪社などがある。河合神社の祭神は玉依姫であり、鴨長明はこの神官の息子であった。三井神社は三井家ゆかり、貴布祢神社は鞍馬の方の貴船神社と同じであり、呪いの丑の刻参り＝闇の神道で有名である。稲荷社と言うまでもなくお稲荷さん、諏訪社は長野の諏訪大社の元であり、諏訪では伊勢神宮と並ぶ御神木の祭り、御柱（おんばしら）大祭と式年遷宮がある。

さて、両賀茂神社の紋は双葉葵である。元々の三つ葉から欠けた葉は、実は河合神社であり、河合神社こそ本来の賀茂神社なのである！藤原不比等の策により河合神社が封印されたため、三つ葉の1つを封印して双葉としたのである。そして、賀茂神社と伊勢神宮とは表裏一体。よって、“本来の伊勢神宮”を封印したが故に、伊勢神宮と表裏一体である賀茂神社も“本来の賀茂神社”を封じなければならなかったのである。

いよいよ“神道の奥義”と“日本の核心”に迫る。ここまでは、すべて前置きと言っても良い。それほど、神道の奥は深いのである。

#### (6)伊勢神宮と三種の神器

現在の伊勢神宮の構造は、ご承知の通り、外宮と内宮から成る。(他に、様々な摂社や末社も含め、全部で 125 社。先に外宮を参拝し、それから内宮を参拝するのは、日本人として常識だろう。)

- ・外宮（豊受大神宮）：豊受大神＝ヤハウエ。
- ・内宮（皇大神宮）：天照大神＝イエス。

表向き、豊受大神（女神）は天照大神（女神）に食物を捧げる神であるから、内宮の方が格が上で、単に“お伊勢さん”と言った場合、内宮を指す。しかし、裏ではそれぞれが「合わせ鏡」で同一神（男神）であり、神道では人間に関わる神を格上とするから、天照大神＝イエスが祀られている内宮が格上なのである。そして、天照大神＝太陽神だから、イエスの復活を太陽の復活に見立て、冬至の日（最も太陽が隠れる日＝それ以降は太陽が復活する日）に昇る太陽が、宇治橋の鳥居の間を通過するようになっている。宇治＝ウジ＝ウヅで、“光”の意味である。

これまでに、三種の神器の内「八尺瓊勾玉」は「マナの壺」のことで、伊勢神宮の外宮に（「八尺瓊勾玉」は皇居に）、「草薙の剣」は「アロンの杖」のことで、熱田神宮に祀られていることは述べた。そして、応神天皇は「十戒石板の

納められた契約の箱アーク」「マナの壺」「アロンの杖」を手中に収めることにより、大和朝廷を開いた。よって、内宮に祀られている「八咫鏡」は「契約の箱アークに納められた十戒石板」である。では、何故、これが鏡なのか。最初にヤハウエは 2 枚の裏表両面に刻んだが、モーゼが破壊し、次はモーゼ自身が刻んだ。しかし、十戒を刻んだのは片面（表面）だけであった。裏面には、「生命の樹」の奥義＝合わせ鏡の絶対三神のことが刻まれていたと推定されるが、たちまち偶像崇拜するような民たちであるため、奥義を伝授することをやめたのであろう。ただし、両面から片面だけ、とすることにより奥義のヒントは残したのである。そして、「十戒石板」はピカピカの大理石（\*）であった。よって、2 枚の石板と表と裏でそれぞれ「合わせ鏡」の奥義を示しているのである。

\*十戒石板の素材は諸説有り、次のようなものが挙げられる。

- ・ブルーサファイヤ（硬度 9）
- ・オニックス（瑪瑙、硬度 7）
- ・ラピス・ラズリ（トルコ石、瑠璃、硬度 5～6）
- ・大理石（硬度 3）

いずれも、王族などがこぞって愛用していた鉱物である。「十戒石板」はそのこの大きさの石板で、大理石以外、鉱物を加工しなければならず、石板となるほどの大きさのものは滅多に産出しない。また、「十戒石板」はモーゼが怒って打ち砕き、2 回目はモーゼ自身が石を切り出し、十戒を刻んだ。これからすると、硬い鉱物では無理である。最も硬い鉱物はダイヤモンドで硬度 10 であるから、ブルーサファイヤやオニックスではない。よく言われているのがラピス・ラズリであるが、この硬度もオニックスに近く、何とか文字は刻めたとしても、打ち砕くのは困難である。

よって、大理石＝マーブルが最も妥当である。マーブルは“光り輝く”を意味するギリシャ語に由来し、天照大神の「八咫鏡」に相応しい。

また、式年遷宮に限らず、伊勢神宮では儀式に使う祭具はすべて官幣辛櫃（かんぺいからひつ）に入れ、担いで運ぶ。辛櫃とは、伽耶（加羅）の神話に登場した“黄金の櫃”の櫃に由来し、すなわち、「契約の箱アーク」である。アークは担がなければならなかったもので、担いで運ぶのである。そして、特別な儀式の時には、すべて焼かれてしまう。しかし、焼かれない辛櫃が 1 つだけある。それは“御船代（みふなしろ）”と呼ばれており、内宮の御神体「八咫鏡」を納めているものである。“船”と言えば“ノアの箱舟”であり、それは“アーク”とも言われた。よって、御船代とは“アークの代わり”という意味であり、本物の御神体である「十戒石板」が「契約の箱アーク」に納められているのに対し、十戒石板のレプリカである「八咫鏡」が“御船代”に納められているのである。エルサレムの神殿では、「十戒石板」は「アーク」に納められていたのであり、神社も幕屋形式の神殿であるから、「十戒石板」のレプリカである「八咫鏡」は「アーク」のレプリカである“御船代”に納められているのである。

アークは元々ヤハウエが造らせたものであるから、安置場所としては外宮が

相応しい。しかし、外宮には同じくヤハウエに関する「マナの壺」が安置されていること、「マナの壺」よりも「アーク」の方が格上であること、ヤハウエ＝イエスであること、外宮よりも内宮の方が格上であることから、「アーク」は「十戒石板」と共に内宮に安置されているのである。

だが、何故、「アロンの杖」だけが伊勢神宮ではないのか？

#### (7) 式年遷宮

式年遷宮は伊勢神宮の代名詞と言っても良い。伊勢神宮は各地を転々として現在の位置に落ち着いた経緯があり、立ち寄った先々に元伊勢という名称が残っている。外宮は籠神社から「マナの壺」が直接移動しているので、元外宮は籠神社だけである。よって、元伊勢とは内宮の移動のことである。

式年遷宮について、伊勢神宮の伝承では次のようになっている。(所々加筆してある。)

“国の内に隈なく光が照り徹ると称えられる皇大御神の御神体は、八咫鏡で、八坂瓊勾玉と草薙剣を加えて三種の神器と呼ばれます。

この御鏡を代々宮中で天皇ご自身がお祀りされていましたが、第10代崇神天皇の御代に国中に疫病が発生し、祟りであると考えた天皇が天照大神と大和国の地霊である倭大国魂（ヤマトオオクニタマ）を皇居の中に招き、自ら祭司となって祀られました。しかし、天照大神の霊力が強すぎて、天皇と一緒に居ることが危険となりました。そのため、皇居の外、大和の笠縫邑（かさぬいのむら）に神籬（ひもろぎ）を立ててお祀りすることになりました。神籬とは榊のような常緑樹で囲われた神聖なお祀りの場を意味します。そこでは、天皇にお代わりして、豊鍬入姫命（トヨスキイリヒメノミコト）が皇大御神をお祀りされていましたが、その荒魂はなかなか静まらず、垂仁天皇の御代に至って、倭姫命（ヤマトヒメノミコト）が新たに皇大御神をお祀り申し上げるにふさわしい地を求められることになりました。

倭姫命は大和の国を始め伊賀、近江、美濃の諸国を巡られましたのち、伊勢の国の度会（わたらい）の地、宇治の五十鈴川の川上に到られ、皇大御神のお教えのままに「祠（やしろ）」を建ててお祀り申し上げることになりました。実に21年も掛けて巡幸し、ようやく落ち着いたのです。祠は社とも書き、家（や）や屋（や）の代（しろ）という意味で、大きなお祭りに際してそのつど新たに建てられる建物のことです。（や＝ヤ＝神、しろ＝城＝神を祀るために清めた場所。）

神籬や祠のように臨時にたてられる建物が、神の宮（神の宮殿）、つまり神宮と呼ばれるほどに大きな規模になりましたのは、天武天皇から持統天皇の御代にかけてのことです。20年に一度の大祭、神宮式年遷宮もこの時代に始まりました。”

天武と持統の時代に、現在の式年遷宮が始まったので、それ以前＝封印される前の形態は継承されていないのである。

式年遷宮は20年毎に行われる。“動く”といっても、隣の御敷地に移動するだけであるが、125社すべて遷宮されるのである。正殿は南向きなので、東西の

移動であり、それを交互に繰り返している。遷宮する表向きの理由は、先ほどの伊勢神宮の伝承のためである。しかし、第 15 代応神天皇以前は架空であり、日本神話は聖書を基に創作された。

聖書の中で動いていたものと言え、幕屋形式の神殿、すなわち、「アーク」である。「アーク」は、ヘブライの地では最長でも 20 年しか同じ場所に留まらなかったことを思い出そう。「20 年」という数字には、このような意味がある。

そして、式年遷宮は 8 年掛けて行われる。8 は救世主の象徴であり、20 年から 8 年を引くと 12 年となり、12 人の使徒である。

また、式年遷宮の際、儀式の初めに宮司が鶏の鳴き声を 3 回真似る。これは、古事記の岩戸開きに於いて、まずは鶏をたくさん集めて岩戸の前で鳴かせたことに由来するが、似たような話が聖書にもあった。“最後の晩餐”の後、イエスがペトロに「あなたは今夜、鶏が鳴く前に、3 度、私のことを知らないと言うだろう」と預言し、その通りになったことである。元は、これである。

さて、このように見てくると、元伊勢とは「アーク」が移動してきた場所ということになる。しかし、「アーク」が到着した最初の地は九州物部王朝である。ならば、そこからの移動となるが、元伊勢と呼ばれているところは、いずれも近畿～東海地方だけである。現に、応神天皇が建立した宇佐八幡宮は幕屋形式の移動式神殿であり、皇室第二の祖廟と言われるほどの格式であり、九州各地には元宇佐が存在する。ならば、元宇佐こそが「アーク」の移動を表すのである。神輿は「アーク」を模したものであるが、東大寺の大仏建立の際、宇佐八幡宮から八幡神が紫の鳳輦に乗せられて東大寺へ巡幸したことが、神輿の起源であった。これからも、「アーク」は宇佐八幡宮に安置されていたことが解る。そして、ある時期に伊勢神宮に一気に移動した、いや、移動させられたのである。その時期とは、公式に式年遷宮が定められた天武と持統の時代で、藤原不比等の策である。

では、元伊勢と言われる以上は、「アーク」に匹敵する他の御神体があり、それが巡幸した場所が元伊勢であり、それこそが内宮の“本来の御神体”ということになる。内宮はイエスを祀っているから、イエスに直接関わるものが“本来の御神体”である。

#### (8) 天武時代以前の伊勢神宮

藤原不比等による策の以前は、外宮、内宮共に、三棟並びの正殿で構成されていた。伊勢神宮の正殿が三棟並び建っていた頃の祭神は、正殿に向かって左から次の通りである。

- ・内宮：神産巢日神、天之御中主神、高御産巢日神（古事記の造化三神）
- ・外宮：豊狭槌尊、国常立尊、国狭槌尊（日本書紀の造化三神）

古事記と日本書紀の造化三神の「合わせ鏡」であり、両宮三神は同じ神である。当然、これは「生命の樹」そのものであり、正殿向かって右（高御産巢日神、国狭槌尊）がイエス・キリストである。“参拝”とは、これら三神を拝む“三

拝”が語源であろう。

現在でもそうであるが、式年遷宮の跡地には小さな祠（ほこら）が建っている。これを覆屋（おおぎや）と言ひ、“心御柱（しんのみはしら）”が建てられていた場所である。心御柱については後述するが、これを基準に正殿を建てる位置が正確に決められている。建家自体も「生命の樹」を表すのであれば、「覆屋」「正殿」の2つでは、「三界」を表すのに1つ足りない。

また、伊勢神宮の構造自体を「生命の樹」と見立てると、外宮が「峻巖の柱」、内宮が「均衡の柱」となり、人間に対して最も重要な「慈悲の柱」に相当する宮が無い！

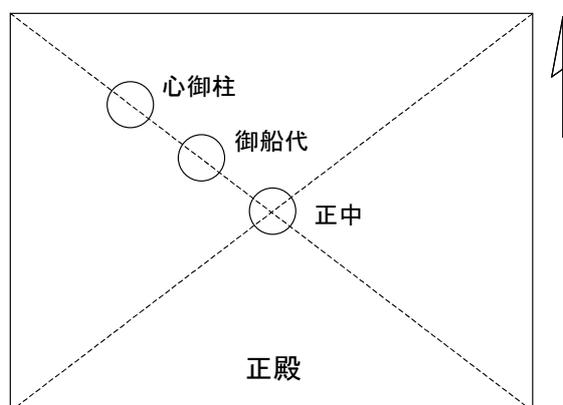
この謎を解く鍵こそ、“心御柱”である。

#### (9)心御柱の正中外し

心御柱とは、建物の中心（正中、せいちゅう）に位置する大黒柱のことである。例えば、五重塔の中心の柱がそうである。（五重塔の心御柱は浮いているが、それが余計な力を分散する作用があるらしい。）また、数年前に発見された出雲大社の心御柱はとてつもなく太く大きいもので、三本一束であり、太古の社殿が巨大なものであったことを裏付けた。

伊勢神宮では、心御柱のことを他に、天御柱（あめのみはしら）、忌柱（いみばしら）、天御量柱（あめのみはかりのはしら）などと呼ばれており、やはり三本一束である。心御柱は“大黒柱”であるから、本来、三本一束の各柱に対して1つずつ正殿がなければならない。そのため、藤原不比等による策の以前は、外宮、内宮共に、三棟並びの正殿で構成されていた。そして、言うまでもなく、三本一束は「生命の樹」に対応している。心御柱は見ることも、口にすることも憚れる、奥義中の奥義なのである。

しかし、伊勢神宮の心御柱は、外宮、内宮共に正中からずれており、正中には見かけ上、何も無い。これを「心御柱の正中外し」と言う。何故、建物の最も重要な正中を外してあるのか？「心御柱の正中外し」を図示する。



正中から西北方向（神道では西北、西南、東北、東南と言う）にずれて正殿

床上に御船代があり、更にずれて正殿床下に心御柱がある。

心御柱は三本一束であり、「生命の樹」を表す。そして、白い絹で3ヶ所縛られていて三界を表し、下の1/3が地中に埋まっている。上の各1/3が建家の覆屋と正殿に対応しているならば、下の1/3で地下殿の存在を暗示している！伊勢神宮には地下殿が存在するという噂は以前からあったらしい。一説には、自然の洞窟を利用しているともいう。その入り口までにはいくつかの段階があり、大宮司以外、何人たりとも入ることは許されない。地下殿の扉には、何故か18紋の菊の御紋があり、地下殿の手前で参拝することを“内御影（うちみかげ）参拝”と言う。（16紋=1+6=7で神の数字、裏の8は救世主。18紋=1+8=9で、裏の10は十字架！）

表向き、建物の最も重要な正中に何も存在しないということは、正中直下の地下殿に最も重要な“御神体”が存在することを暗示している！

つまり、外宮では「マナの壺」、内宮では「十戒石板を納めたアーク」が正中直下の地下殿に安置されているのである。内宮の御船代には十戒石板のレプリカである「八咫鏡」が、外宮の御船代には「マナの壺」のレプリカである「八尺瓊勾玉」、もしくは何も無いのである。（皇居の「八尺瓊勾玉」は、更にこのレプリカかもしれない。あるいは、その逆かもしれない。）

地上にある御神体が地下にある“本物の御神体”のレプリカであるならば、心御柱も、地下殿にある“本物の心御柱”のレプリカであることを意味している。これこそが、秦氏が持ってきたイエスに関する聖遺物“旗竿”である！

また、「心御柱の正中外し」を外宮から見ると、正中には外宮よりも重要な内宮が相当する。内宮から見ると、それよりも重要な宮は見あたらない。しかし、それこそが封印された宮、本来の伊勢神宮、伊雑宮（いざわのみや）である！

すなわち、「心御柱の正中外し」とは、封印された最も重要なものを暗示するための仕掛け、カッパーラのことである。

#### (10)伊勢神宮の真相

##### ・本来の御神体

伊勢神宮にある三種の神器は、ユダヤの三種の神器である「マナの壺」と「十戒石板を納めたアーク」である。これだけでも大変な事実であるが、本来の御神体は、心御柱で象徴される秦氏が持ってきたイエスに関する聖遺物“旗竿”である。旗竿とは、神社で利用される掛け軸を吊す様なT字型の竿のこと。八咫鳥は“旗竿”ではなく“羽田竿”と書くので、単純な旗竿ではなく、秦氏に関わる特別な竿のことである。

聖書で旗竿と言えば、「青銅の蛇」が巻き付いていた「モーゼの旗竿」が思い出される。「青銅の蛇」はイエスの予型であり、“旗竿”はイエスが掛けられた「聖十字架」の予型であった。そして、旗=はた=機=機物=十字架であった。また、使徒言行録第10章39節には、人々はイエスを木に掛けて殺した、とあり、十字架はイエス=青銅の蛇が掛けられた「生命の樹」の象徴でもあった。

更に古事記では、榊に八咫鏡が掛けられ、そこに天照大神＝イエスが映ったことにより、光が復活した。つまり、イエスが榊＝「生命の樹」に掛けられていることを暗示している。

よって、心御柱で象徴される“本来の御神体＝旗竿”とは、イエスが掛けられた「聖十字架」であり、それが内宮正殿の正中直下の地下殿に安置されている“本物の心御柱”なのである！！

イエスが掛けられた「聖十字架」は T 字型であり、横木（パティブルム）と縦木（スティプス）が取り外し可能で、横木は約 1.6m、縦木は約 4.8m である。この横木が忌柱であり、縦木为天御柱である。ちなみに、八咫鳥は忌柱のことを輓（くびき）、天御柱のことを轅（ながえ）とも呼ぶ。輓とは、牛車などの荷車に付ける横木のこと、牛や馬はこれに繋がれて車を運ぶ。轅とは、輓と車を繋ぐ縦木のことである。

「十戒石板を納めたアーク」も正中直下にあるので、「アーク」の上に「聖十字架」は真っ白な絹で覆われて安置されている。「アーク」の上は贖いの座であり、イエスは磔刑に処せられることによって人類の罪を贖ったから、このような配置となる。

この「聖十字架」は、ヨーロッパの各地にあるような聖十字架教会が保有する“偽の”十字架ではなく、イエスが処刑された“本物の血染めの聖十字架”である！！忌柱には 2ヶ所、天御柱には 1ヶ所、血の付いた釘跡が残っている。不思議と、2千年を経た今でも、全く腐敗することなく、新木同様であるらしい。

それ故、公然とキリスト教であることを公開することなく、徹底的に封印したのである。そして、「聖十字架」に直接触れることができたのは、祭司一族であるレビ族、古事記では「八咫鏡」を榊に掛けた天太玉命の子孫、忌部氏である。忌部氏こそは秦氏の中の秦氏であり、その中の特別な祭司一族が賀茂氏であり、更にその中の特別なメンバーが八咫鳥である。よって、天皇家は元々ガド族であるから、天皇陛下といえども、内宮の正殿直前まで入ることは許されていないし、御神体や三種の神器を見ることもできないのである。（表向き、天照大神は天皇家の祖先である。ならば、祭司は入れなくとも、子孫は入れるはずである。こういう矛盾に気づいて欲しい。）

そして、イエスの聖遺物であり伊勢内宮の御神体である「御神木＝聖十字架」を、かの地から野を越え山を越え、河を渡り海を越えて曳いてきた追体験が、神宮式年遷宮行事の「御木曳き」に他ならない。なお、「御木曳き」の原型は、エルサレムに神殿を建設する際、レバノンから木材を運んできたということである。これも、旧約と新約の「合わせ鏡」になっている。

対する外宮正殿の正中直下には、本物の「モーゼの旗竿」が安置されている！これを天御量柱と言う。外宮で祀られているのはヤハウェである。ヤハウェは“契約の神”であり、律法に従うことを要求した。人は死後、ヤハウェによっ

て裁かれる（量られる）のであり、それ故、天御量柱と呼ばれている。

そこには「青銅の蛇」が掛けられており、蛇は3回転半して旗竿に巻き付いている。これは、「生命の樹」に蛇が3回転半して絡まっていることに由来する。ただし、「青銅の蛇」は背教時に偶像ネフシュタンとして拝まれてしまったため、破壊された。しかし、それを復元して掛けたのである。破壊と復元、これは、“イエスの死と復活”を表しているのであり、十字架に掛かったイエスの象徴でもある。つまり、内宮の「忌柱+天御柱」と「合わせ鏡」なのである。

また、神社の手水舎には、水を吐き出す青銅の蛇や竜がよく見受けられる。この原型が、外宮の「モーゼの旗竿」に掛けられた「青銅の蛇」である。荒野に於いて、モーゼは岩を杖で突いて水を得た。そして、イエスは永遠に渴くことのない「生命の水」となった。それ故、水に関係するのである。更に、アオダイショウが神の使いとして崇められるのもこの「青銅の蛇」に由来し、その突然変異である白蛇が神として崇められるのは、イエスが白く光り輝く王だからである。

なお、外宮の地下殿には、四方を囲む4本の柱が立っており、その正中に天御量柱が祀られている。これは神＝ヤハウエの戦車メルカバーと神聖四文字テトラグラマトン YHWH を表す。

4本の柱といえば、諏訪大社の御柱祭が有名で、1つの社に於いて長さの異なる4本の御柱が建てられ、合計4つの社についてすべて建てられる。外宮の地下殿にある4本の柱も長さが異なり、諏訪大社の御柱祭の原型は外宮の地下殿である。そして、諏訪（大）社は下鴨神社の末社である。

#### ・本来の伊勢神宮

「心御柱の正中外し」から暗示される、封印された本来の伊勢神宮は伊雑である。伊雑宮は内宮の別宮で、鳥羽を南下した磯辺の近くにある。主祭神は天照坐皇大御神御魂（アマテラスニイマススメオオミカミノミタマ）で、地元の人たちからは“いぞうぐうさん”として親しまれている。謂れは次の通りである。

“天照大神の御杖代（みつえしろ）として巡幸中だった倭姫命は、伊雑方上の葦原に於いて、よく実った稲穂をくわえながら鳴いている真鶴を見た。そこで、伊佐波登美命（イザハトミノミコト）に命じてその穂を取り、皇大神の御前に奉った。これを記念して伊佐波登美命が宮を造営したのが、伊雑宮の始まりである。”（伊佐波＝イザナミとも読める。）

伊雑宮は、とかく問題を起こす神社として有名であり、氏子が島流しにあったこともある。特に有名なのが「大成経（たいせいきょう）事件」である。これは、1670年に刊行された「旧事本記（くじほんぎ）大成経」が一貫して物部氏の正当性を主張しており、「本当の伊勢神宮は伊雑宮である」と述べている。これにより、伊勢神宮から猛反発を受け、朝廷までが乗り出す事態となった。最終的には偽書と判定され、とりあえず一件落着した。

旧事本記とは、一般的に「先代旧事本記」として知られる書物で、聖徳太子が蘇我馬子らに編纂させたものであるとも伝えられている。内容的に、古事記や日本書紀に含まれない同時代の情報が記されているため、中世では記紀と並んで神道の根本神典「三部の神経（しんぎょう）」と考えられていた。旧事本記にも造化三神は登場し、元初の神が「天祖天譲日天狭霧国禪日国狭霧尊（アマツオヤアメユズルヒアメノサキリクニユズルヒクニノサキリノミコト）」、次に「天御中主尊（アメノミナカヌシノミコト）」「可美葦牙彦舅尊（ウマシアシカビヒコジノミコト）」である。

この一帯は元々物部系の矢氏が治めており、言い伝えの真鶴などの鳥は秦氏の象徴であるから、秦氏によって封印されたことを意味している。旧事本記も偽書として封印されたとすれば、伊雑宮がここまでの事件を起こすことは、納得できるものである。

ならば、何故、伊雑宮が本来の伊勢神宮なのか？それは、「聖十字架」が最終的に鎮座した地であるからだ！この国での「聖十字架」の最初の上陸地点は、籠神社であった！籠神社の謂れとして、“天照大神が大和の笠縫邑から移動してきて、それを吉佐宮（よさのみや）＝与謝宮として祀り上げた”というのがあった。その吉佐宮こそが、「聖十字架」の最初の到着を記念したものである。「よさ＝ヨシュア」であり、ヨシュアはモーゼ亡き後、ヘブライの民を“約束の地”まで導いた預言者であった。それに因んで「吉佐宮」なのである。また、籠神社が天橋立＝ヤコブの梯子の袂にあるのも、「聖十字架」が最初に上陸した地だからである。そして天橋立は、股覗き＝逆さ見＝「合わせ鏡」で見る。

そこから、この御神体は移動し、最終的に伊雑宮に鎮座した。「いざわ＝イザヤ」であり、イザヤは救世主の出現を最初に預言した預言者であった。それに因んで「伊雑宮」なのである。外宮、内宮、伊雑宮の並びは「生命の樹」の三柱を表し、最も重要な「慈悲の柱」が封印されたのである。

#### 【外宮：峻巖の柱、内宮：均衡の柱、伊雑宮：慈悲の柱】

そして、この移動経路こそが元伊勢なのである。元伊勢と称する神社は27箇所あるが、中でも「本伊勢」と称す神社は籠神社と伊雑宮だけである。また、籠神社の裏社紋は六芒星＝ダビデの星で、奥宮に立つ石碑に刻まれていた。（雑誌に掲載されたため、現在は八咫鳥の意向により、三つ巴紋に変更されている。）そして、伊雑宮の裏社紋も六芒星で、鳥居の前にある石灯籠と、内宮と外宮を結ぶ道路の両脇にある石灯籠に刻まれている。

なお、元伊勢の最初は大和の笠縫邑となっているが、そこには、秦河勝が手掛けた「秦楽寺（じんらくじ）」があり、境内の小さな祠が笠縫神社として祀られている。しかし、秦氏は朝鮮半島から渡来したのだから、笠縫邑とは、朝鮮半島の出発地点と考えたほうが良いだろう。

よって、「聖十字架」の最初の上陸地点である籠神社と、最終的に鎮座した伊雑宮で「阿吽」を成す。「阿吽」はサンスクリット語であり、「阿」は開いてお

り始まりであるから「陽」、「咩」は閉じており終わりであるから「陰」である。イエスは、私はアルファでありオメガである、と言った。これも、最初で最後、ということで「阿咩」、陽と陰である。（「アーメン」も同様であることは、＜その他の代表的宗教＞で述べた。）

そして、籠神社と伊雑宮を結ぶ直線上＝西北－東南ライン上に、外宮と内宮が鎮座する！心御柱の正中が西北ラインにずれていたのは、これを暗示していたのである。そして、藤原不比等による策以前の、外宮、内宮に三棟ずつあった正殿も、西北－東南ラインに“斜めに”並び建っていたのである。

なお、この並びはオリオン座にも関連する。オリオン座は三ツ星＝「生命の樹」が4つの星＝「神の戦車メルカバー」で囲まれた構造であるが、地球上でオリオンの象徴はギザの三大ピラミッドであり、その「合わせ鏡」の配列が、伊雑宮を含めた伊勢神宮の配列である！

伊雑宮で、イエスに関するお祭りが行われる。毎年6月24日に行われる「御田植え祭」である。全国各地、いろいろな御田植え祭があるが、ここのはかなり変わっている。ゴンバウチワという大きな竹柱を立てる。中心の太い柱を忌竹と言う。それは忌柱に由来する。ウチワには「太一」という文字が書かれる。これは、式年遷宮の「御木曳き」の時にも書かれる文字である。「太＝太秦の太＝ウズ＝光＝イエス」だから、「唯一の光、イエス」を表す。

午前中に、まず、お田植えする早乙女たちが苗場を3週半する所作で苗取りが開始される。これは、「モーゼの旗竿」に掛けられた「青銅の蛇」が3回転半で巻き付いていることを暗示する。その後、畦に立てられていたゴンバウチワを立人が3度仰ぎ、神田の中心に向かって倒す。これは、絶対三神崇拝を暗示する。そこに、下帯姿の近郊漁村の青年たちが集まり、勇壮な竹の奪い合いが行なわれる。奪った竹は各自が持ち帰って船霊に祀り、大漁祈願などのお守りとされる。竹片は、イエスの体の一部である。イエスの体を分け与えるということは、聖体拝領である。

その竹取りが終わると、お田植えが始まる。この際、少女に扮した7～8歳の童男1人が太鼓を打って囃し立てる。“船”は「アーク」、女装は女神に変更されたイエスを表す。

さて、外宮、内宮、伊雑宮で「生命の樹」の三柱を表し、正殿、覆屋、地下殿で三界を表すのであれば、伊雑宮にも地下殿があったことになる。（訪れた際に、覆屋は存在した。）実は、元々「聖十字架」は伊雑宮の地下殿に安置されていたのである。しかし、藤原不比等＝秦氏の策（裏で八咫鳥の策）により“新生伊勢神宮”が造営される際、「聖十字架」は強引に内宮に移動させられた。それ故、伊雑宮が「本当の伊勢神宮である」と主張して問題を起こしていたのである。

こうして御神体である「聖十字架」が移動させられて「慈悲の柱」である伊雑宮が封印されると同時に、外宮と内宮の正殿も三棟から一棟へと変更された。しかし、心御柱を三本一束にして“正中を外す”ことにより、封印を解く鍵とした。そして、伊勢神宮と表裏一体である賀茂神社の中で、最も重要な河合神

社も封印されたのである。

では、現在、伊雑宮には何も御神体は無いのか、と言えば、そうではない。内宮に匹敵にする、御神体が納められている。時が満ち、“本来の伊勢神宮”が復活することになった時、伊雑宮が本宮となるために。では、「聖十字架」に匹敵する御神体とは何か。

キリスト教では「神の御名（みな）のもとに」とか、「御父と御子と聖霊の御名のもとに」と言うが、伊雑宮が本宮となれるのは、そこに“名”があるからである。“名”とは、八咫鳥に言わせれば“首”のこと。“首”とはアダム・カドモンでの首のことで、頭部である。では、T字型十字架の頭部とは何か。イエスが掛けられた十字架には、上に「罪状板」が掲げられていた。そこには、「ナザレのイエス、ユダヤの王」とギリシャ語、アラム語、ラテン語の3言語で書かれていた。“名”があるからこそ、伊雑宮が伊勢神宮の本宮たり得るのである。なお、「ナザレのイエス、ユダヤの王」をラテン語で記述すると、“Iesus Nazarenus Rex Indaeorum”であり、頭文字を取ると“INRI”である。この略語は、様々な絵画にも描かれている。そして、“稲荷=INARI”という言葉は“INRI”に由来しており、稲荷=ヤハウエ=INARI=INRI=イエスである。

伊雑宮が本宮となるのであれば、地下殿に心御柱が必要である。現在、それに見合うものは伊勢神宮には無い。しかし、伊勢神宮に安置されていないユダヤの三種の神器が1つだけある。「草薙の剣」こと、「アロンの杖」である。実は、「アロンの杖」が伊雑宮の「心御柱」なのである！伊雑宮に「アロンの杖」が戻された時、“本来の伊勢神宮”が復活する！！

それは、いつなのか？伊勢神宮と表裏一体を成すのは賀茂神社。表が動く前には裏が動く。すなわち、封印された河合神社が復活する時、それが徴となり、熱田神宮から伊雑宮へと「アロンの杖」が戻される。そして、“本来の伊勢神宮”が復活する。

#### (11) 日の丸と日本（にっぽん）

このように、徹底的な封印が成されたわけだが、八咫鳥は、伊勢神宮に十字架が安置されていることを堂々と示してきたと言う。これこそが、カバーラである。大は小の中に、小は大の中に隠し、両者は表裏一体となり、霞の中に消え去る。つまり、誰もが判るところに、堂々と示してきたのである。それは何処か？「日の丸」と「日本」という国号である。

「日の丸」自体の歴史は古く、赤い丸が太陽を表し、武将などが扇に描いたりしているが、国旗として定められたのは意外に新しく、しかも、国会で決まったとか、天皇が決めた、とかいうものではない。明治維新の際、鹿児島島津家が提唱したのである。島津家は秦氏。日本国旗のポール（白黒）は八咫鳥を、ポールの先の金玉（きんぎょく）は金鷄を、日の丸は天照大神を表す。これは、神武天皇に勝利をもたらした象徴であり、天照大神=イエスだから、イエスの象徴でもある！

「日本」という国号は、聖徳太子の国書「日出づる処の天子…」が起源と思

われているが、それだけではない。漢字破字法では、

日本＝日＋大＋十（＝日＋一＋人＋十）

であり、“光り輝く1人の人が、十字架に掛けられた”という意味である。つまり、「日本」＝「十字架に掛けられたイエス」なのである！！

更に、「日」は4画で偶数だから陰、「本」は5画で奇数だから陽である。しかし、「日」を象徴で表すと「日の丸」だから「○」となり、1画で開いた形「阿」だから陽、「本」は十字架だから「十」となり、2画で閉じた形「吽」だから陰であり、漢字の画数と「合わせ鏡」となる。

カッパーラは象徴だから、「日本」という国号は「日」が「○」、「本」が「十」で象徴され、森羅万象を貫く陰陽を表すと同時に、「阿吽」＝「アルファでありオメガである」十字架に掛けられたイエスをも表すのである！！何という、神道の奥深さよ…。そして、「日の丸」を国旗として提唱した島津家の家紋は“○の中に十”である。

また、内宮の御神体を「聖十字架」＝陰としたために、祀り上げる神は“陰である女神”とせざるを得なかった。

対して、外宮は陽である。これは、内宮以外のすべての神社である！内宮に「聖十字架」があるからこそ、内宮のみ陰なのである。内宮の唯一神に対して、外宮は八百万の神々であるから、外宮は何でもあり、である。内宮の千木は雌木、伊勢外宮のそれは雄木で陰陽を成す。しかし、外宮の豊受大神も女神となっているのは、この良い例である。

このように、本物の「ユダヤの三種の神器」と「イエスの聖遺物」を意識的に守り抜いてきたのが秦氏（八咫鳥）、天皇家であり、無意識のうちにカッパーラと一体化して守り抜いてきたのが日本人なのである。

先日、伊勢詣した際に、様々な象徴を確認できた。例えば、境内に入るのに渡る橋は宇治橋＝ウズ橋＝光の橋。外宮正殿の鯉木は9本、他の社は5本で陽数。対して、内宮正殿の鯉木は10本、他の社は6本と陰数で、外宮と内宮で陰陽を成している。しかも、カッパーラのシンボルの数字である。内宮正殿の10本の鯉木は、十字架を表すのであろう。（熱田神宮の正殿は、「三種の神器」の1つが祀られているということで、式年遷宮後の内宮の“お古”である。）

また、外宮正殿前には三ツ石があった。三ツ石とは、8個の石で囲み、中心に3本の立石があるもの。石の囲みで七五三の魔法陣の区切りを表し、最も重要な中心に絶対三神を表す三ツ石である。外宮の元伊勢である籠神社には3つの磐座があり、これも象徴しているのであろう。

内宮は奥まった小高い山で、土台が大きな石垣で組まれており、聖十字架も安置できる。

更に、伊雑宮がある近鉄志摩線の駅名は上之郷（かみのごう）である。鳥羽から賢島まで駅名を見ると、おもしろいことに気がつく。

・鳥羽－中之郷－志摩赤崎－船津－加茂－松尾－白木－五知－沓掛－上之郷－磯部志摩－穴川－志摩横山－鵜方－志摩神明－賢島。

海辺の地なのに、鳥に関連する地名が多く、秦氏との関わりを伺わせる。そして何よりも、鳥羽－志摩赤崎－船津－加茂－松尾－白木－五知－沓掛－上之郷の並びがおもしろい。“鳥の羽”は秦氏の象徴で、“赤”はアダム。“船”は「アーク」で、「アーク」を扱えた“加茂＝賀茂氏”は秦氏の中の秦氏。そして、秦氏の総本山は“松尾”大社で、朝鮮半島の“白木＝新羅”の流れを汲む。七五三のゲマトリアで囲まれた5（＝五芒星＝知恵）の重要性を知る。沓掛（くつかげ）は京都に“沓掛山”があり、その山超えを“唐櫃（からひつ）超え”と言ひ、“唐櫃”＝「アーク」である。伊雑宮は“上之郷＝神の郷（さと）”である。

穴川－志摩横山－鵜方－志摩神明－賢島の並びでは、“横山”の“穴”はイエスが葬られた洞窟で、“鵜＝う＝鳥（う、からす）＝八咫鳥＝鳥（とり）＝天使”がイエスを洞窟から復活させ、“神明＝神の明かり＝光”が戻り、あな“かしこ”で出来過ぎ。

ちなみに、伊勢の五十鈴（いすず）川はイエズス＝イエス。伊勢もイセ＝イエセ＝イエス。外宮の宇治山田は、ウジヤマダ＝ウズ山＝光 or イエスの山。

## (12) 伊勢神宮の使命

飛鳥氏と対談した大鳥は、次の驚愕的事実を付け加えた。

“伊勢神宮の復活に先行して、賀茂神社が三宮並び立つ構造へと変革する。河合神社には新たに巨大な神殿が建てられ、神道界に君臨する神社となるだろう。こうして、すべての準備が整ってくる。

伊勢神宮が蘇った後、天照大神が降臨する！！その時、誰もが天照大神の御姿をその目で見ることになる。そして、伊勢神宮の使命もまた、それをもって終焉となる！！”

何と、伊勢神宮は天照大神降臨のための印であり、八咫鳥は天照大神が降臨されることを知っており、それに基づいて行動していたのである。八咫鳥は、イエスの12人の使徒が原型である。ならば、イエスの預言を成就させるために行動してきた、と言っても過言ではない。イエス自身も再臨することを預言している。“最後の審判”の時に、本当のエルサレム＝イエスの本来の教えを守り抜いてきたエル・シャローム＝平安京に！

その時、真の王権を授けられているのが誰なのか、明らかになる。そして、ヴァチカンが偽キリストであり、イエスの血を受け継いでいると主張する、メロヴィング王朝の流れを汲むヨーロッパ王室は反キリストであるということが、白日の下に晒される。

\*本来の伊勢神宮の復活について

伊雑宮が本来の内宮になるためには、そこに聖十字架（本物の心御柱）がなければならぬが、伊雑宮の心御柱になるべきものは「アロンの杖」である、と八咫鳥は言っている。ならば“その時”には、地下殿には聖十字架、地上には「アロンの杖」となるのか。あるいは、八咫鳥の言っていることが矛盾しているのか。秘密を死守してきた鳥たちだから、言っていることの矛盾はあり得ない。

そこで、“本来の伊勢神宮”の解釈として、「三種の神器」がすべて揃い、外宮、内宮、伊雑宮の三宮すべてに心御柱が揃った状態であると考えれば、矛盾なく説明できる。この状態が、天照大神をお迎えできる状態である。

天照大神が降臨されると、伊勢神宮の使命は終わる。ならば、「三種の神器」が揃った三宮の状態が終わり、唯一絶対神として象徴される天照大神が実在されるわけだから、唯一の神の宮となることと解釈できる。その宮には、罪状板が付けられた「聖十字架」と「三種の神器」がすべて揃って1つとなる。これらの御神体を直接拝することは、ともすると偶像崇拜に繋がり、保管状態も考えると、温度と湿度が安定している地下に安置することになるだろう。

現在の伊雑宮にはそれほどの地下殿を建造できる土地ではないから（以前は聖十字架の横木と縦木をばらして安置したのだろう）、おそらく、現在の内宮御正殿の場所が“本来の伊勢神宮”の場所になると考えられる。

そして、神宮と表裏一体を成す賀茂（河合）神社が最大の外宮となる。ただし、賀茂神社は1994年に世界遺産に登録されたので、伊勢神宮の復活に先行して、三宮並び立つ構造へと変革することはできず、河合神社に新たに巨大な神殿が建てられることもない。現在の賀茂神社の式年遷宮は、社殿を造りなおすのではなく、傷んだ所を直すという修理のため宮移しであるから、その式年遷宮が始まってから終わるまでの期間のどこかで、“すべての準備が整う”のであろう。

### (13)天照大神御降臨の時期

では、その御降臨＝最後の審判の時期とはいつなのか？

A：数字のカッパラーによる推測

イエスは33歳で処刑されたという説がある。これは、「生命の樹」の（隠されたダアトを含めて）11個のセフィロト、22個のパスを合わせた数字に由来する。イエスの死後、千年間サタンは封印されるが、その後の千年間は地上をサタンが支配する。そして、「最後の審判」の時にイエスが再臨するから、2033年である。これは、次々回の式年遷宮の年である！しかし、イエスの生誕年・没年は明らかではなく、それを基準にできる証拠が今のところ無い。また、大鳥との会談でこのようなことが述べられたのが2001年であるから、それからかなりの時間が経過することになる。

では、西暦元年を基準とすると、サタンの封印は1000年まで、それ以後、2000年までは地上をサタンが支配した。その支配の切れ目、2001年に大鳥との対談

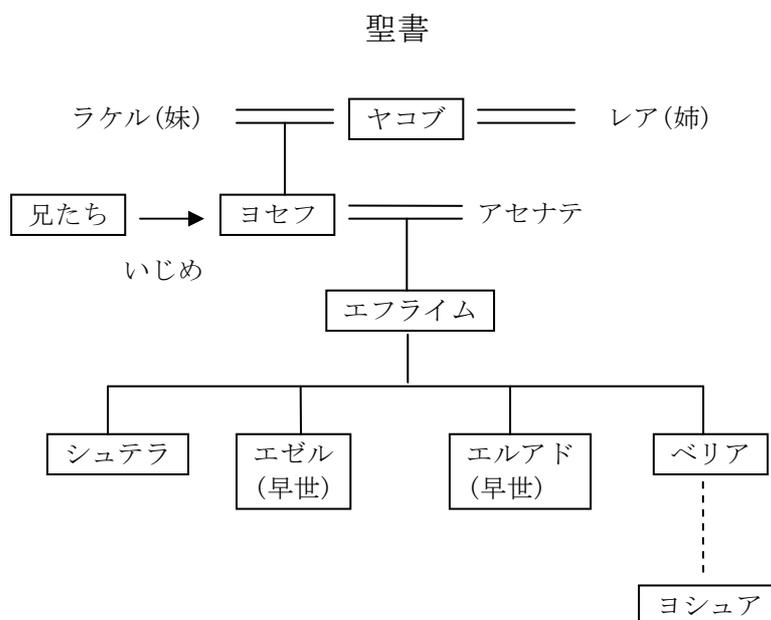
があった。対談は 2000 年に申し込まれていたが、返事は無しの礫（つぶて）。ようやく、2001 年の春に実現されたのである。八咫鳥が預言の下に行動してるとなると、これには 1 つの大きな意味がある。その後、毎年を 12 人の使徒一人一人に当てはめていくと、イエスは聖なる数 13 人目となり、2013 年である。これは、次回式年遷宮の年である！！

特に、前年の 2012 年は注目の年である。現時点（2009 年 3 月）での三百人委員会の世界統一政府樹立予定が 2012 年である。また、マヤ文明に残されたマヤ暦では、2012 年の冬至が“現在の時代の終焉”となっている！この“終焉”とは、三百人委員会の意図するような“資本による人類奴隷化計画”の終焉であるならば、そこから新たな光の時代が始まる、とも解釈できる。

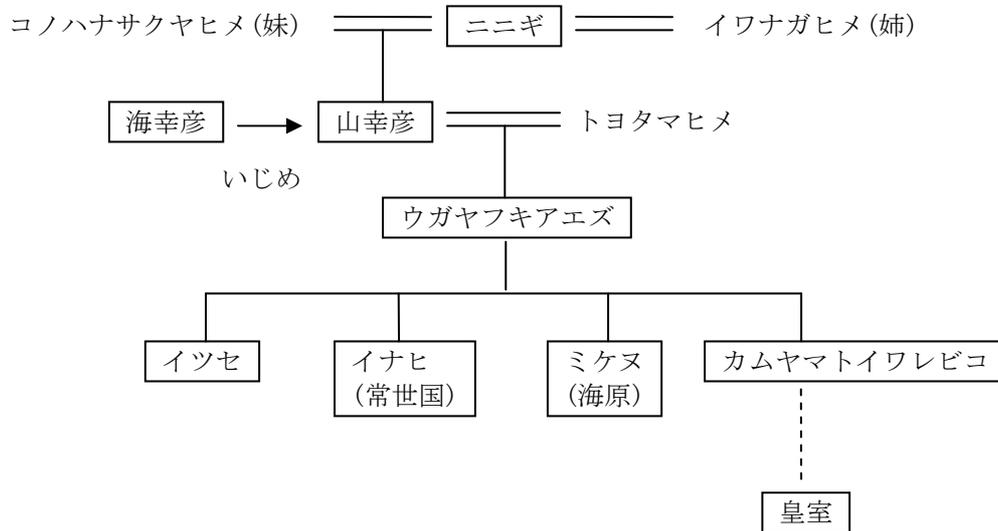
#### B：天皇家の支族及び元号から推測

ここでは、初代応神天皇は失われた十支族の中のガド族であるという飛鳥説が妥当であるため、採用した。しかし、サイエンス・エンターテイナーで聖書解説家である久保有政氏は古代日本とユダヤの関係を論じており、天皇家は失われた十支族の中のエフライム族である、と推定している。（「日本の中のユダヤ文化」、学研ムーブックス。）その根拠として、以下のような理由を挙げている。（エフライム族とは、ヤコブ（イスラエル）には 2 人の息子がおり、兄がマナセ、弟がエフライムであり、弟エフライムの子孫がエフライム族である。）

- ・神武天皇の系図がエフライムの系図と同じである。



## 日本神話



- ニニギの古語は“実り多い”で、エフライムはアラム語で“実り多い”で一致するから、天皇家はエフライム族の王族である。
- ユダヤ人研究者ヨセフ・アイデルバーグ氏によると、神武天皇の正式名「カム・ヤマト・イワレ・ビコ・スメラ・ミコト」は、アラム語で「カム・ヤマトウ・イヴリ・ベコ・シュメロン・マクト」となり、非常に良く似ている。意味は「サマリアの王、ヤハウエのヘブル民族の高尚な創設者」となる。サマリアとは北イスラエル王国のことであり、サマリアの王とは、エフライム族の王家である。
- 中央アジアのキルギスにはマナス叙事詩があり、キルギス人がマナセの子孫であることを示している。また、昔2人の兄弟が居て、1人は山の方へ行ってキルギス人の祖先となり、もう1人は海の方へ行って日本人の祖先となった、という伝承がある。これから、日本人の祖先はエフライムである。そして、この話は海幸彦・山幸彦の話の原型である。
- 京都御苑の清涼殿にある天皇の玉座の前には、獅子とユニコーン（一角獣）の像がある。そして、即位式で使われる高御座（たかみくら）にもユニコーンのデザインがある。また、下鴨神社の狛犬は、向かって右が獅子、左が角の生えた狛犬である。狛犬とは正確には獅子だけではなく、ユニコーンも含まれる。獅子はユダ族、ユニコーンはエフライム族の象徴である。ただし、

本来のユニコーンとは、一角の獰猛な野牛である。旧約のエゼキエル書には、こうある。

“見よ、私はエフライムの手にあるヨセフと、その友であるイスラエルの部族の木を取り、これをユダの木に合わせて、1つの木と成す。これらは私の手で1つとなる。…見よ、私はイスラエルの人々を、その行った国々から取り出し、四方から彼らを集めてその地に導き、その地で彼らを1つの民と成してイスラエルの山々におらせ、1人の王が彼ら全体の王となり、彼らは重ねて2つの国民とならず、再び2つの国に分かれない。”

木とは杖のことであり、王権のことである。これは、神が将来、エフライムに代表される北イスラエル王国の子孫と、ユダに代表される南ユダ王国の子孫を1つにする、ということである。そして、エフライムには“杖”がある。つまり、世界のどこかで、王権を維持しながら存続している。この預言にぴったり当てはまるのが日本である。秦氏よりも前に日本に来たのはエフライム族で、それが原始神社と初代天皇を保持してきた。

久保氏はこのように推定し、他にも言語の類似性からユダヤとの関連を述べている。例えば、アラム語で東方のことをミズラホと言うが、日本は昔から瑞穂の国と言われており、言葉が類似していることも指摘している。しかし、飛鳥説の「帝＝ミカド＝ミ・ガド＝ガド族出身」という説について、「マナの壺」のことなどは考慮せずに簡単に切り捨てているのは、自分にとって都合の良い解釈に過ぎないと思われる。また、初代天皇は秦氏と共に渡来してきた応神天皇であるから、エフライム族が初代天皇を保持してきた、という説は誤りである。

他に、ヒエログリフ解読による古代エジプトと関連付けた説がある。この著者（平御幸、たいら・みゆき）は、ヤコブ（イスラエル）の息子ヨセフを重要視している。ヨセフを重要視しているのは、ヨセフの息子エフライムの支族が重要な役割を果たすからである。

[http://www.geocities.jp/atelier\\_efraym/yamataikoku1.htm](http://www.geocities.jp/atelier_efraym/yamataikoku1.htm)

平御幸氏は、やはり天皇家はエフライム族であると推定している。その説は、次のようなものである。

- ・平成というのは、“平”の字によって象徴されるエフライムの木が完成することである。旧約のエゼキエル書は、このことを象徴している。

“見よ、私はエフライムの手にあるヨセフと、その友であるイスラエルの部族の木を取り、これをユダの木に合わせて、1つの木と成す。これらは私の手で1つとなる。…見よ、私はイスラエルの人々を、その行った国々から取り出し、四方から彼らを集めてその地に導き、その地で彼らを1つの民と成してイス

ラエルの山々におらせ、1人の王が彼ら全体の王となり、彼らは重ねて2つの国民とならず、再び2つの国に分かれない。”

このイスラエルの集合預言は、1つの民族が復元されることのみを語っているのではない。南ユダ王国はユダヤ教を、北イスラエル王国はキリスト教を暗示し、しかも、旧約聖書の神と新約聖書の神が同一であることを伝えている。それが、ユダの木にエフライムの木を接ぐ、という言葉である。ユダの木とエフライムの木は上ナイルと下ナイルの関係となり、マナセとエフライムの関係となる。だから、兄マナセをユダという名前に置き換えてみると解り易いだろう。

エフライムの木が“平”の字によって象徴されることは後で述べるが、ここでは、“南ユダ王国はユダヤ教を、北イスラエル王国はキリスト教を暗示する”という箇所が根本的に間違っている。背教した結果、北イスラエル王国が誕生したのであり、北イスラエル王国はユダヤ教である。イエスは南ユダ王国に誕生したから、南ユダ王国が原始キリスト教である。(南にしても、大部分は歪んだユダヤ教だったので、イエスは処刑された。)そして、兄マナセをユダという名前に置き換えてみる、というのも根拠が無い。

では、天皇家は何族なのか。最初は飛鳥説の通り、ガド族であったと推定される。ガド族が「マナの壺」を継承したという伝承と、実質の初代天皇である応神＝仁徳天皇陵が「マナの壺」の形状をしていることが、その証拠である。これは、飛鳥氏が八咫鳥との問答でも確認していることである。また、カップラからしても、古墳のように、解るところに堂々と隠すというのが常套手段だからである。そして、物部氏に婿入りした初代天皇が「マナの壺」を所有し、物部氏は「アロンの杖」を所有していたと考ええると、いろいろ辻褃が合う。勿論、言葉上の「ミ・ガド＝ガド族出身」も理由の1つである。アラム語では“ミガド”は“貴人”という意味であり、天皇家に相応しい。

このように、初代天皇家はガド族であるが、その後は不明であり、様々な支族から輩出している可能性があるが、こればかりは裏のことであり、八咫鳥に聞いてみないと解らない。しかし、エゼキエル書が存在する以上、天照大神御降臨の前には、エフライム族とユダ族が表に出てくることは間違いない。

久保、平の両氏は、イエスはユダ族の王だから、ユダ族の王は再臨するイエスであり、よって、“その時”の天皇家はエフライム族である、としている。しかし、イエスは至高世界に達した存在であり、エフライムとユダの関係はあくまでも地上の現象と解釈できないのか。エゼキエル書を見直してみる。

“見よ、私はエフライムの手にあるヨセフと、その友であるイスラエルの部族の木を取り、これをユダの木に合わせて、1つの木と成す。これらは私の手で1つとなる。”

1つの木と成すのは「私」であり、「私」はイエスである。ならば、ここでいう「ユダ」は「イエス」のことではなく、あくまでも“地上に於けるユダ族”と解釈の方が適切である。そうすると、エフライム族とユダ族が1つの木となる現象が起きた時、天照大神＝イエスが再臨することとなる。

久保氏は、木＝杖＝王権と解釈しているが、木＝杖ならば、他の解釈も可能である。その鍵は、現在封印されている伊雑宮の心御柱、「アロンの杖」である！伊雑宮にアロンの杖が戻されて心御柱となる時こそ、すべての準備が整った時であるとしている。ならば、「エフライムの木」とは「アロンの杖」のことであり、それを合わせて一つとする「ユダの木」とは伊雑宮となる。聖十字架は最初に伊雑宮に存在したので、伊雑宮は聖十字架＝ユダの木の象徴でもある。

つまり、「アロンの杖」は元々、近畿・東海の物部氏である尾張氏＝海部氏のものであるから、物部氏で最大の勢力を誇った尾張氏＝海部氏こそが、北イスラエル王国＝サマリアの王族、エフライム族の王族であると言える！そうすると、ガド族だった大王・真沸流が物部王朝に婿入りしたことは、ガド族から物部王朝の最高権力者エフライム族に移籍したことになる。だから、真沸流＝初代・応神天皇＝神武天皇の系図にエフライムの系図が重ねられても矛盾しない！

そして、伊雑宮に「聖十字架」を運び込んだのは秦氏であり、秦氏は南ユダ王国だから、主な構成はユダ族、ベニヤミン族、レビ族である。イエスに関する物を扱えたのは祭司支族であるレビ族だけであり、それは賀茂氏＝八咫鳥である。そうすると、表の大王たる天皇陛下は、“その時”には王の血統であるユダ族でなければならないことになる！

日本神話は秦氏によって創作された。691年には、持統天皇が（藤原不比等と組んで）石上神宮など物部系の神社から古文書＝物部氏の歴史書を没収し、国内の16の豪族（物部系）の系図をすべて提出させ、そこに秦氏を絡めて新たな“正史”を創作したのが日本神話である。そして、系図などもカバーラであるから、1人の人物にいくつもの象徴が重ねられ、本質が見えなくなっている場合が多い。神武天皇の系図にしても、イスラエルの民を約束の地カナンに最終的に導いたヨシュアに神武天皇をなぞらえたもの、と解釈すべきであるし、前述のように、ガド族の大王がエフライム族に婿入りしたことから、エフライムの系図に重ねられるのである。

だから、久保氏が指摘している神武天皇の系図や正式名、ニニギ（元は物部氏の神）の意味などは、物部氏の伝承に初代天皇の神話を準えた逸話を信じているにすぎず、従って、初代天皇＝エフライム族という過ちを犯すことになる。

また、先ほどの平御幸氏は、元号から“その時”を推定している。

“上エジプトは“中”という漢字で、下エジプトは“平”で表される。“平”には深い意味があって、2本の横棒が天と地、縦棒と2つの点で3つの太陽を表す。要するに、日の出、南中、日没の3つの太陽が観測できる場所が平地であり、

それには下ナイルが相当する。またエジプト語では、エフライムは枝分かれして巡る葦の川となり、下ナイルの象徴となる。何故なら、エフライムの枝分かれは、三叉に流れる下ナイルの大三角州を表すからである。だから、“エフライムの木”は“平”の字によって象徴される。よって“平成”という元号は、“平”の字によって象徴される“エフライムの木”が完成する、ということである。”

確かに、“平”という字は、次のように分解できる。



左側はイエスが掛けられた T 字型の十字架である。ならば、右側の横棒は「契約の箱アーチ」の上部、向かい合う点是一对のケルビムである。つまり、“平”という字は、「契約の箱アーチ」の贖いの座に安置された「聖十字架」を表す。

確かに、“平成”になってから愛知県が目立ち始め、日本の経済を牽引している。この地は尾張氏管轄であるから、まさにエフライムの土地である。ただし、エフライムの意味は平御幸氏の言う天皇家のことではなく、物部氏である尾張氏＝海部氏のことであり、エフライムの木は「アロンの杖」のことである。

そして、“その時”に天照大神が御降臨されると、“私はアルファでありオメガである”から、「阿吽」が完成となる。アルファと阿は始まりであり、イエスの誕生を表し、オメガと吽は終わりであり、イエスの再臨を表す。終わり＝尾張に通じるから、“その時”＝“終わりの時”には、尾張氏あるいは尾張氏に関係するものが重要な役割を果たすわけである。それはすなわち、尾張地方が注目される時期であり、尾張氏所有の「アロンの杖」が伊雑宮に戻され、王権の印が伊勢神宮にすべて揃うことに他ならない。

尾張氏が「阿吽」の「吽」に相当するのは、狛犬からも解る。向かって右の「阿」像は獅子であるからユダ族の象徴で、イエスはユダ族の中に誕生した。左の「吽」像はユニコーンであるからエフライム族の象徴で、それは物部氏の中で最大勢力を誇り、王権の印である「アロンの杖」を所有する尾張氏である。

平御幸氏は、様々なヒエログリフ解読と聖書から、イエスの再臨は 2037 年であると予測している。しかし、平成の元号は今上陛下の年齢を考慮しても、あと 30 年も続くわけがない。平成がエフライムの木が完成されることを意味するのなら、平成の期間中、あるいは平成の次の元号が始まった時、完成されたエフライムの木をユダの木に接ぐために、イエスは再臨すると推定するのが妥当である。

また、現在の皇室は、30 年も経過したら宮家が存在しない。つまり、天皇家のみということになる。それに、皇室の存続問題は一時的に保留されたものの、近い将来、また真剣に議論しなければならなくなる。今後、東宮家に皇統継承者が生まれる可能性はほぼゼロであり、しかも昨年 (2006 年)、弟宮 (秋篠宮) に待望の皇統継承者が誕生した。そして、聖書に於ける血統継承は、ことごとく弟が優先されている。“その時”にも当然、そうなると考えられる。ならば、

仮に現在の皇太子殿下が即位しても、それは一時的なことであり、皇統は更に秋篠宮殿下から悠仁親王殿下へと継承されることが、ほぼ決定的となった。まさに、“平”の字のつく平成の時代に、弟宮への皇統継承移動が明らかとなった。

更に、飛鳥氏と大鳥との問答は2001年であるから、2037年だとかなりの時間が経過することになる。

よって、元号が平成の間に、何らかの大きな兆候が現れるであろう。実は、久保、平の両氏が指摘している“エフライム族とユダ族が1つの木となる現象が起きた時、イエス＝天照大神が再臨すること”は、ある歌で暗示されている。誰もが知っている「かごめ歌」である。

<かごめ歌>

かごめ かごめ

籠の中の鳥は 　　いついつ出やる

夜明けの晩に 　鶴と亀がすべった

後ろの正面 　だあれ

この歌詞は、普通に考えたら、何を言っているのか解らない。イスラエルと日本が手を結ぶとか、日本に大地震が起きてから何かが公開されるとか、諸説言われている。しかし、いずれも“正しい解釈”が成されたことはなく、すべて誤りである、と断言できる。日本人なら誰でも知っているが、誰もが意味を理解していない、ということは、カッパーラに他ならない。

では、このカッパーラを解く前に、「日の丸」の意味について再考する必要がある。日の丸は、白地の四角が赤い丸を囲んでいる形である。ここで、日の丸は国旗としての旗であるが、白旗と赤旗を考えると、その基は源平の合戦に於ける源氏の白旗と平家の赤旗である。源氏は騎馬戦が得意であり、海人族も仲間にしてきたから（同族だから）、失われた十支族＝物部氏、平家は集団での海戦が得意で、ペルシャ人のような風貌だったとも言われているから、失われていない二支族＝秦氏である。“平”という文字に十字架が隠されていることから、平氏は秦氏である。そうすると、日の丸は白地に赤丸だから、秦氏を物部氏を取り囲む形、すなわち、十支族が二支族を取り囲む構造である。このことを念頭において、かごめ歌をカッパーラ的に解釈する。

“かごめ＝籠目”とは、竹で編んだ籠にできる隙間で、六角形で六芒星の象徴である。六芒星はユダヤ教の象徴だから、物部氏を象徴している。籠目紋は古代史の謎を紐解く籠神社と伊雑宮の紋でもあり、ここでも物部氏を象徴している。（伊雑宮の場所は、物部氏の領地だった。）

“鳥”は精霊で、秦氏の象徴である。籠は物部氏の象徴だから、“籠の中の鳥”とは、物部氏が秦氏を取り囲む形、すなわち、十支族が二支族を取り囲む構造となり、日の丸＝日本の象徴である。

そうすると、“籠の中の鳥は 　いついつ出やる”とは、日本の真実はいつ公開

されるのか、ということになる。鳥は秦氏であり、秦氏が守り抜いてきた日本の秘密はイエスの奥義であるから、イエスの奥義がいつ公開されるのか、ということである。

“夜明け”とは、太陽が現れる＝太陽神イエスが再臨する＝世界に真実が公開される、ということであるから、“夜明けの晩”とは、イエスが再臨する前、世界に真実が公開される前、ということである。

“鶴と亀がすべった”の鶴は鳥で秦氏＝失われていない二支族、亀は六芒星で物部氏＝失われた十支族の象徴である。特に、鶴は伊雑宮の由来に登場する、稲穂をくわえながら鳴いている真鶴に通じる。そして、“すべる”は“滑る”ではなく“統べる”である。つまり、秦氏と物部氏、ユダヤのすべての支族が1つになる＝日本で真実が公開されるということである。

“後ろの正面 だあれ”とは、後ろ向きの人が正面を向くと誰なのか、ということである。“後ろ”と言えば、カッパーラでは後ろ向きのアダム・カドモン象徴であり、神は顔を見せなかったので後ろ向きである。そして、アダム・カドモンは「生命の樹」と神の象徴である。それが正面を向くとは、実際に神が降りてきて姿を見せることに他ならない。アダム・カドモンは1人であり、人間に関わる唯一絶対神はイエスである。(一般的解釈では、この部分の誤解が最も甚だしいが、アダム・カドモンであることを見抜くことは難しい。)

以上のことから、かごめ歌は次のように解釈される。

“奥義を守り抜いてきた日本の真実はいつ公開されるのか。世界に公開される前に、まず日本で事実が公開され、日本が真に1つとなる。その後、世界にも公開される。その時、天照大神＝イエスが降臨し、誰もがその御姿を拝見することとなる。”

まさに、八咫鳥が言っていることそのものである。

C：日本の情勢から推測

A、Bの推測からすると、次回式年遷宮の2013年前後が最も可能性が高い。では、現在の日本の情勢から推定すると、どうなのか。

#### ・河合神社の復活

八咫鳥は、伊雑宮が復活する前に、裏である河合神社が復活すると言っている。しかし、前述の通り、河合神社の表立った復活はあり得ない。賀茂神社の次回宮移しは平成27年、神宮式年遷宮は平成25年であり、どちらも既に遷宮準備が進められている。神宮の式年遷宮と賀茂神社の宮移しの年差は次第に開いていくから、神道の裏と表が連動するためには、次回式年遷宮前後が最も可能性が高い。

#### ・伊勢神宮の大宮司

今年(2007年)の7月から、伊勢神宮の大宮司が交代した。今までは、旧皇

族の北白川道久氏であったが、現在は旧公家の鷹司尚武氏である。

北白川氏は皇族の北白川宮永久王の長男で、明治天皇のひ孫にあたり、戦後、皇籍を離脱した。祖母の北白川房子さんは、1947年から1974年まで神宮祭主(\*)を務められた。学習院大学を卒業後、東芝に入社し、音響海外部長、国際協力室長、財団法人東芝国際交流財団専務理事などを歴任した。2001年4月、神宮大宮司に就任した。

鷹司氏は、昭和天皇の三女で神宮祭主も務めた故・鷹司和子さんの養子である。鷹司氏は1972年に慶応大学大学院修士課程修了後、NECなどを経て、2003年からNEC通信システム社長を務め、今年退任した。現陛下の義理の甥にあたる。

#### \*神宮祭主

大海人皇子は天武天皇に即位の直後、中断していた斎王の派遣を復活した。大来皇女(オオクノヒメミコ)を数十年ぶりに斎王に任じ、以後それを制度化した。また、斎王を補佐して神宮の祭祀を執行する役職として祭主を創設した。更に、それまで両宮の大宮司を独占していた渡会氏を抑えて神宮の管理の実質的な直轄化を図ろうとし、内宮の禰宜には、新たに中臣氏と関係のある荒木田氏を世襲させ、在地性の強い渡会氏には外宮の禰宜のみを世襲させた。しかし、この世襲も明治4年7月の神宮改革により廃された。

古来、伊勢神宮の祭祀は天皇の直轄するものとされ、天皇の御杖代として斎宮(斎王)に皇女・女王を当てるのを常としたが、後醍醐天皇の代で廃絶した。その後、祭主は藤波氏が世襲していたが、明治の神宮改革により罷免となった。

現在の祭主は、昭和天皇の四女、池田厚子さんである。

鷹司家は、五摂家の1つで公家である。鎌倉時代中頃、藤原氏北家嫡流の近衛家実の四男・兼平が祖である。家名は平安京の鷹司小路に由来し、家紋は牡丹である。

戦国時代、鷹司忠冬を最後に一旦断絶したが、江戸時代初期、二条晴良の子の信房が鷹司家を再興して近代まで続く。1743年、閑院宮直仁親王の皇子である鷹司輔平が鷹司家を継承した。江戸後期から幕末にかけて鷹司家の当主が閑白を務める機会が多く、特に鷹司政通は30年余りにわたって閑白を務めた。また、信房の娘の孝子が徳川家光の正室となったことから、弟である鷹司信平は松平を名乗ることが許され、天皇家に仕える公家から、徳川家の旗本へと転身した。この武家の鷹司家は、代を重ねるごとに加増され、最終的には上野吉井藩主家となった。

尚武氏の父は松平乗武氏、義父は鷹司平通氏である。つまり、分かれた鷹司家が1つになったのが尚武氏である。鷹司家は藤原氏の血統であるから、遡ると天兒屋根命の流れを汲む中臣氏である。天照大神が岩戸に籠もられた際、八咫鏡を榊に掛けたのが天太玉命、祝詞をあげていたのが天兒屋根命である。このような血統を有する鷹司尚武氏が神宮の大宮司に選ばれたことは、それなりの意味があると考えられる。荒木田氏の世襲だった頃から見れば、再び、中臣系が大宮司に復活したことになる。

鷹司は“鷹を司る”であり、鷹は鳥で、鳥は聖霊に関するから、「生命の樹」の「峻巖の柱」に相当する。そして、大宮司としてイエス＝「慈悲の柱」を祀り上げるから、まさに祝詞をあげていた天児屋根命に相当し、天照大神が御降臨される時の大宮司として相応しい。

また、神宮の大宮司としては戦後9人目だから、1人当たり約6～7年の任期である。そうすると、鷹司氏の任期は次回式年遷宮終了後ぐらいまでとなり、任期的にも、まさに式年遷宮のために就任したと言っても過言ではない。

以上のことから、“その時”は、次回式年遷宮の2013年前後の可能性が最も高いと推定される。2012年を1つの時代の終焉とするマヤの暦は、実はシュメールと大いに関係があり、作成者の真相と暦が示している天文学的事象が重要なのである。これについては<神々の真相>で検討する。

神宮宇治橋に掛かる鳥居の中心から、冬至の日に太陽が昇る。冬至は昼が最も短くなる日で、翌日から少しずつ昼の時間が長くなる。つまり、冬至とは“太陽の死と復活”を象徴している。また宇治＝ウズで、宇治橋は“光の橋”となり、冬至の日につかる柚子湯の柚子は、象徴的には柚子＝ウズ＝光＝イエスなので、まさに“イエスの死と復活”に相応しい。

つまり、2012年の冬至とは、新たなる時代の幕開けを象徴しているとも考えられる。ならば、2013年に“新たなる時代の幕開けを告げる式年遷宮”が行われ、天照大神＝イエスが御降臨されるのかもしれない。

飛鳥氏との対談で、大鳥は最後にこう述べている。

“投じられた一粒の石が起こす波紋は、やがて池全体へと広がり、そこに留まる「鴨」たちを四方へと飛び立たせるだろう。”

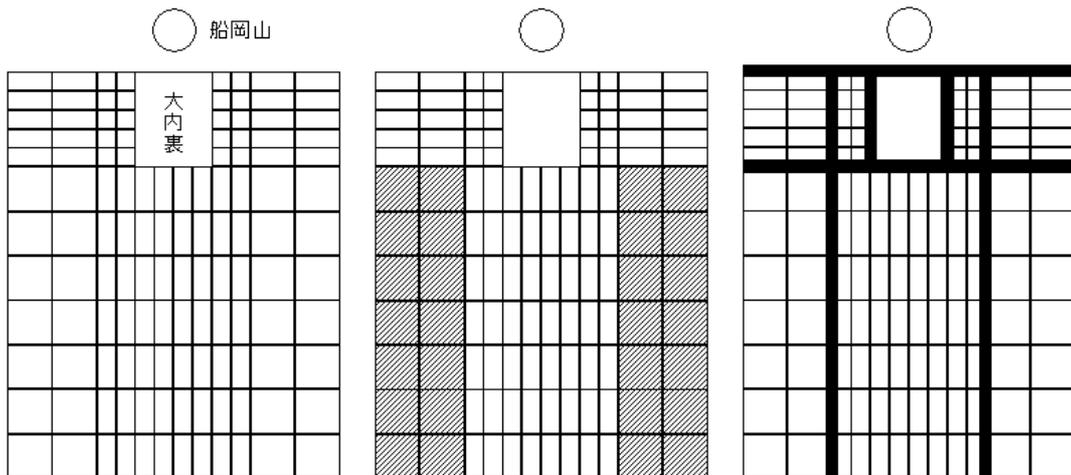
よって、“その時”は遠くない。

<平安京について>

(4)陰陽道とカッパーラで、平安京の概略について述べた。ここでは、更に詳細を説明する。

A：平安京の構造

平安京がアダム・カドモンであることは、前述の通りである。下の図は旧平安京の見取り図である。正方形の部分を塗りつぶしていくと、長方形の升目で構成された人形（ひとがた）が浮かび上がる。船岡山はアダム・カドモンの頭部に相当する。更に、その浮かび上がった人形の外形を浮かび上がらせると鳥居となり、鳥居の額束の部分が大内裏となる。このアダム・カドモンは、上から見て向かって右＝東が重要である。平安京は南向きで、太陽は南から北を照らし、太陽は神の象徴である。だから、太陽から見て向かって右＝上から見て向かって右＝東が重要となる。そのため、貴族の館を含めた現在の御所は、元々の大内裏の位置（船岡山の南）よりも西ではなく東に移動している。

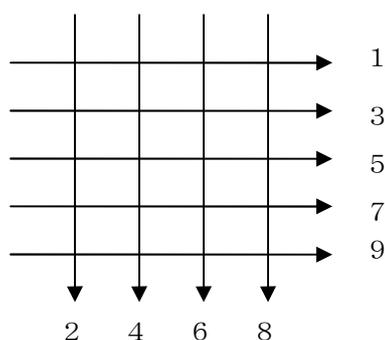


秦氏は船岡山に磐坐（いわくら）を置き、神の姿を完成させた。また、船岡山は T 字型十字架の罪状板にも相当する。罪状板には「ナザレのイエス、ユダヤの王」とギリシャ語、アラム語、ラテン語の 3 言語で書かれていた。これをラテン語で記述すると、“Iesus Nazarenus Rex Indaeorum” であり、頭文字を取ると“INRI”で、“稲荷＝INARI”の語源であることは前述の通りである。その証拠に、船岡山には命婦稲荷神社があり、稲荷神社の総本山である伏見稲荷の元宮として最古の稲荷神社となっており、稲荷は宇迦御魂（ウカノミタマ）＝豊受大神＝ヤハウエであるから、稲荷という名称からも、ヤハウエ＝イエスということを示唆している。また、この人形自体が十字架でイエスを象徴すると同時に、鳥居はヤハウエを象徴しているから、イエス＝ヤハウエを示唆している。そして、船岡山の船＝「アーク」だから、「契約の箱アーク」も暗示して

おり、南北（条）、東西（坊）それぞれ 12 の升目は、イスラエルの十二支族とイエスの 12 人の使徒を表している。

エルサレムには船岡山に相当する山があり、それは“聖なるオリーブ山”である。エルサレムの T 字型の頂点は神殿の燔祭台の位置であり、その下に血を落とすための丸穴が開いていた。その場所はアブラハムが息子イサクを犠牲にしようとしていた場所であるため、その丸穴はアブラハムが聖別して建てた柱の跡と考えられている。そこは“モリヤの山”“シオンの丘”とも言われている。

都の碁盤目は唐の長安に倣ったというのが通説であるが、実は陰陽道の九字（くじ）切りが碁盤目の原型である。（九字はドーマンと言ひ、裏は十字、すなわち十字架である。）右手人差し指と中指を立てて（刀印、とういん）横と縦を交互に切ることにより、縦 4 升、横 3 升の計 12 升の碁盤目が出来上がる。これは、ユダヤの祭司支族レビ族が首から掛けた胸当てエポデと同じであり、その胸当ての部分が大内裏で「生命の樹」のティファレトに相当する。



昔の人は、平安京は呪（じゅ）に支配された都と考え、魍魅魍魎（ちみもうりょう）が跋扈（ばっこ）する都として恐れていた。それは、様々な逸話が教えている。例えば安倍清明（セーマン）と蘆屋道満（ドーマン）の陰陽師対決（実は陰陽道的にはどちらも表）はよく知られている。平家物語には、大内裏の紫宸殿に鶴（ぬえ）という物の怪（もののけ）が現れた、とある。その姿は猿の顔、狸の胴、虎の手足、蛇の尾を持つ怪物である。しかし、このような生物は存在しない。物の怪とは、あるものが別のものに化ける意味で、奥義を隠すカッパーラと同じ仕組みである。つまり、妖怪はカッパーラが基本となって創られたものである。

カッパーラに限らず一般的な陰陽道でも、方位は西南：未申、東北：丑寅、西北：戌亥、東南：辰巳となり、羊と猿、牛と虎、犬と猪、龍と蛇の姿が見える。ここでは、猿、虎、猪、蛇が鶴に対応し、猿の顔、猪の胴、虎の手足、蛇の尾となる。しかし、鶴は猪の胴ではなく狸の胴である。これは、どういう意味か。実は、この鶴を退治したのは源頼政だが、鶴の狸の胴を刺したのは家来の猪早太（いの・はやた）で、胴の部分に猪が相当する。（凝り過ぎ…）

同じようなものがユダヤにもあったことを思い出そう。神の戦車メルカバー＝人と獅子と牛と鷲の顔を持つ怪物である。占星術では、「人の顔」＝（緑）＝水瓶座＝北、「獅子の顔」＝（赤）＝獅子座＝南、「牛の顔」＝（黄）＝牡牛座＝東、「鷲の顔」＝（青）＝サソリ座＝西とする。鷲が鷲座ではなくサソリ座となっているのは、次のような理由による。

“鷲は、人間を表す象徴である。サソリは鷲の逸脱を表しており、鷲の、深淵への墜落である。墜落が起こるには、何かが高みに存在していなければならない。だから、深淵への墜落とは、高みにある領域からの墜落である。ルシファーは天使で高次の存在であったが、神に反逆して地に落ちた。ルシファーは翼をもがれた墮天使である。つまり、サソリとは鷲が萎縮した姿であり、鷲が落とす影である。”

つまり、メルカバーはこれら 4 つの星座に対応している。また、「人間の顔」「獅子の顔」「牛の顔」「鷲の顔」はカッパーラでいう四位階に対応している。それは「流出界」「創造界」「形成界」「活動界」である。流出界から放たれた神の意思は、最頂部のケテルから滅びの世界のマルクトまで電撃のように駆け下りる。つまり、4 つの位階は神の創造の業の、段階的構造を象徴的に表している。そして、天空に於けるこれら 4 つの星座の配置は十字形、すなわち十字架を形成する。

ならば、鶴も方位を表すカッパーラであり、西南、東北、西北、東南に相当するから完全に十字形にクロスして十字架を形成し、かつメルカバーを象徴している。平安京が表の陰陽道の風水により建造されていることはよく知られており、玄武（北、船岡山）、青龍（東、鴨川）、朱雀（南、巨椋池）、白虎（西、山陰山陽道）が都を守っているが、裏のカッパーラでは猿（羊）、虎（牛）、猪（犬）、蛇（龍）がメルカバーと十字架を形成しているのである。

ここで、中国の道教由来の風水について簡単に説明する。

#### ・五行説

万物を成り立たせる 5 つの様態。五行は「木火土金水（もっかどごんすい）」と言い、「五行疎剋（相克）説」では、木は土を押し分けるので土に勝ち、土は水を塞き止めるので水に勝ち、水は火を消すので火に勝ち、火は金を溶かすので金に勝ち、金は木を燃やして抽出されるので木に勝つ相関係を形成する。

対する「五行相性説」では、木は火を生み出し、火は木々を燃やして土を作り、土は土中から金を産出し、金は溶けて水を生み出し、水は木を育てる、となる。

これを春夏秋冬に当てはめると、木は緑を育む春、火は日が輝く夏、金は黄昏で秋、水は氷を生み出す冬となる。1 日に当てはめると、木はさわやかな朝、火は最も陽が高い昼、金は黄金色の空を表す夕、水は静寂の夜となる。更に東西南北に当てはめると、木は日当たりの良い東、火は日照を示す南、金は日が沈む西、水は凍りつく静寂の北を示す。

ここに五色が加わると「五行五色」となる。木、火、土、金、水は、それぞれ青、赤、黄、白、黒の五色で表される。これが東西南北では、東は青、西は白、南は赤、北は黒、中心は黄で示し、更に「四神（しじん）相応」と一緒になって、東は青の青龍、西は白の白虎、南は赤の朱雀、北は黒の玄武、中心が黄竜（中央である地上）となる。

・二十八宿と星宿（せいしゅく）

新月→上弦→満月→下弦→新月のような月の周期は、数え方にも依るが、約27～29日周期となる。天空で月の通り道を白道（はくどう）と言い、古代中国では、白道に接する星座に月が1日1宿ずつ、28日かけて宿ると考えた。古代中国で使われていた星座を星宿と言うが、一般的なイメージの西洋星座とはまったく異なる。

・四神

中国漢の時代の神獣で、玄武、青龍、朱雀、白虎の四神獣のこと。四神獣は二十八宿のうち七宿ずつ割り当てられており、その方角の神獣となり、四方から降りかかる悪災を鎮め、四方を守護すると伝えられている。

北方七宿・玄武：水神。足の長い亀に蛇が巻き付いた形。長寿と富を招く亀と、災厄をよせつけない蛇の霊力を合わせもち、長寿と繁栄をもたらす。亀、甲殻類など硬い甲羅を持つ生物の主。「南斗・牽牛・須女・虚・危・宮室・東壁」の七宿から成る。この付近は現在の秋の星座の領域で、明るい星が少なく、各星宿の名前も亀とは特に関連の無いものが並んでいる。

東方七宿・青龍：長く舌を出した龍の形。天から恵みの雨を降らせ、豊作をもたらし、家運を隆盛させる。魚や蛇など、鱗で被われた生物の頂点に立つもの。「角・亢・氏・房・心・尾・箕」の七宿から成る。現在のサソリ座のS字カーブと、それに続く天秤座・おとめ座の領域を、巨大な龍の姿に当てはめている。

南方七宿・朱雀：炎神。（破壊と再生を司る神。）翼を広げた鳳凰状の鳥形。その翼で災厄を祓い、福を招く。鳥など、羽毛や翼、嘴を持つ生物の長。「東井・鬼・柳・星・張・翼・軫」の七宿から成る。海蛇座の大きなカーブを巨大な鳳凰と見なしている。

西方七宿・白虎：風神。細長い体をした白い虎の形。女性に子宝と安産を授け、夫婦円満をもたらす。獣類、体毛に被われた生物を支配するもの。「奎・婁・胃・昴・畢・觜・参」の七宿から成る。現在のオリオン座を、四足を広げた虎の姿と見なしている。

他に、次のような龍もある。

- ・白龍：古代中国で、天上界の皇帝である天帝に仕えているとされる龍の一種。白い体をしている。龍は基本的に空を飛べるが、白龍は特に空を飛ぶ速度が速く、これに乗っていれば他の龍に追いつかれないともいう。ときおり魚に化けて、地上の泉などで泳いでいることもある。
- ・黄龍：四神の中心的存在。四神が東西南北の守護獣であるのに対し、中央を守るとされる。日本でも、黄龍はめでたい獣とされ、宇多天皇即位の時（887年）に黄龍が出現したと言われている。
- ・黒龍：邪悪な面もあるが、五行思想では黒は北に位置するので、黒龍は北方を守る神聖な龍である。

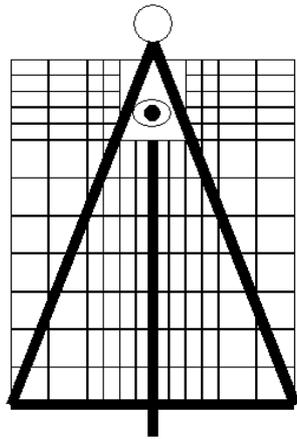
風水学的には、北に高山があるのを玄武、東に流水があるのを青龍、南に沢畔があるのを朱雀、西に大道があるのを白虎と見なしており、これらがすべて揃っているところが最高の場所とされる。つまり、先に見たように、平安京はこの条件がすべて整っているから、最高の場所である。（実際に、自然にすべて揃っている場所は滅多に無いので、人工的に山、川、池、道を造り、そのようにする場合が多い。）

また平安京では、玄武は玄武神社、青龍は八坂神社、朱雀は城南宮、白虎は大將軍神社に祀られている。

このように、中国道教が日本の陰陽道の基である。他にも、天皇（てんのう）という称号も道教由来である。この称号は天皇（てんこう）、地皇（ちこう）、人皇（じんこう）の天皇大帝に由来する。天皇大帝は北極星が神格化され、3世紀ごろに成立した神である。天皇大帝の前身は紫宮に住む太一（たいいつ）神と称し、これを信仰すれば不老不死になれるとされる。太一神は漢代の末から天皇大帝と呼ばれるようになり、東方（つまり日本）を治める最高神として信仰されるようになった。太一の元来の意味は北極星であり、不動の星、天帝の星を表す。すると、神宮の御木曳きや伊雑宮で書かれる「太一（たいいち）」という文字は、神宮そのもの＝天照大神＝太陽神となり矛盾する。しかし、日本に於ける太一の意味は、「太秦」のカッパーラから唯一の光＝イエスということである。唯一であり、不動であることから、“太一”を拝借したのであろう。あるいは、中国に於ける太一神思想も、秦氏が関連しているのかもしれない。（中には、神宮は北極星信仰だった、という説を唱えている民俗学者もいる。神宮も、真意を知っていてかどうかは不明であるが、それを肯定したことがあるらしい。）

他にも、メルカバーを具現化した有名な代表例が、エジプトのスフィンクスである。スフィンクスは人の顔、獅子の胴、牛の尾、鷲の翼である。スフィンクスについては、ピラミッドと合わせて詳細に検討する。

また、平安京を馴染み深い妖怪に喩えると、唐傘お化けとなる。



唐傘お化けの目が大内裏に、頭は船岡山に相当する。その姿が庶民まで降りてきたのが案山子（かかし）である。つまり、案山子は陰陽道に於ける人形で、カッパーラではアダム・カドモンとなる。更に、案山子の“かか”とは、古語で“明けの明星”を意味し、イエスの象徴でもある。案山子が T 字型十字架の象徴だから、当然といえば当然である＝矛盾しない。また、右図のようなイエスを象徴した彫刻もある。これなどは、唐傘お化けそのものである。というか、これを基に、唐傘お化けを創り出したのかも知れない。

#### B：祇園

祇園は京都の代名詞。祇園といえば祇園祭。毎年7月17日がクライマックスである。この日は、ノアの箱舟がアララト山に漂着した日であり、それを記念したものである。（一般的な謂われは表向きである。）

祇園の名称の由来は、日猶同祖論者の間では“シオン（Zion）の丘”と言われている。シオンの丘は、アブラハムが息子イサクを犠牲にしようとしていた場所であり、“モリヤの山”とも言われている。確かに、祇園の氏神がある八坂神社の後ろは東山であるものの、平安京の風水的には水を司る青龍であり、祇園の場所も平地であるから、丘や山には相応しくない。

それよりも、エデンの園にあった川の名称の方が相応しい。エデンの園は4本の川、すなわちピソン川（多量の）、ギホン川（外へ流れ出る）、ヒデケル川（チグリス）、プラス川（ユーフラテス）の水路から水を引いた場所にあった。チグリスとユーフラテスは知られているが、ピソンとギホンに相当する川は、現在は見られない。しかし、ランドサットによる高解像度画像で、クウェートとバスラ付近にある砂利の堆積跡がクウェート川で、ピソン川に相当すること、また古代の国クシュシュの主要な川で、現在は干上がってしまったカルン川がギホン川に相当することが判明した。ラテン系言語のように、ギホンの発音から“h”を抜けばギオンとなる。そして、ギホン川はクシュシュの土地全部を取

り巻いており、ノアの洪水で世界が水に覆われていたイメージに重ねることができる。また、ギオンがギホン川の象徴であるならば、鴨川から祇園の東端に至るまで川ということになり、東端にある八坂神社が青龍を祀る氏神なのも納得できる。そうすると、到達する八坂神社（の後ろの東山）はアララト山に相当し、そこから現在の人類の繁殖が始まった。八坂は弥栄（いやさか）であり、繁栄を意味する。そして、大洪水後に人類の繁栄を約束したのは主＝ヤハウエであるから、八坂＝弥栄＝ヤハウエが人類を繁栄させる約束をした、となる。（また、箱舟で救われたノアの家族は8人で8＝ヤ＝ヤハウエとなる。）

つまり、祇園の語源はエデンの園のギホン川である。

祇園祭で繰り出す 32 隻の山鉦は、「生命の樹」に於けるセフィロトとパスの数を合わせたものである。セフィロトは隠されたダアトを除いた 10 個、パスは 22 個である。ダアトは“知識の門”であり、そこを通るにはイエスのカバーラを知らなければならない。この祭りはエデンの園、ノアの洪水、ヤハウエに関連するが、イエスには直接関係しない。そのため、隠されたセフィロトであるダアトは数えないのであろう。

山鉦は「(アララト) 山」に関連するが、何故か、他の祭りで使われるような神輿ではなく山車である。神輿は「契約の箱アーク」であり、モーゼ以降の時代のことである。祇園祭で再現しているのはノアの箱舟だから、「アーク」が造られるよりも前のことである。そのため、神輿ではなく、山に関連する山車となる。なお、神宮のお祭りでも神輿は出ないが、神輿とは「アーク」を模したものであり、“本物”が存在する神宮では神輿を担ぐ必要が無いからである。

“32”の他の解釈として、箱舟で助けられたノアの家族 8 人、後のイスラエル十二支族、イエスの 12 人の使徒を足しても 32 となる。しかし、ここでは後の時代のイスラエルやイエスに関連させるのではなく、箱舟によって助けられ、人類が繁殖して文明が開化し、「生命の樹」を上昇することを象徴していると考えの方がより妥当であるため、先の見解とする。

#### C：五山の送り火

京都の7月の祭りが祇園祭ならば、8月は「五山の送り火」である。（「大文字焼き」は通称で、正式名称ではない。）送り火は仏教の精進送りのように思われているが、そうではない。日本に於ける仏教は死者のための宗教のように思われているが、仏教は元々、死者や祖先を無視した。すべてを断ち切るのが解脱・悟りへの道だからである。しかし、中国に導入されてから、先祖を敬わないとは何事だ、ということで、ユダヤ教やキリスト教のように先祖を敬うことを始めたのである。だから、精霊流しや送り火は、仏教のものではない。その証拠に、京都よりも古くから送り火を行っていた所がある。それは、群馬県である。

群馬県多野郡吉井町の付近は、昔は多胡（たご）群と呼ばれ、統治していたのが羊太夫（ヒツジダユウ、7～8世紀）という人であった。興味深いことに、この人の墓からキリスト教の十字架と、イエスを示す“INRI”の文字が刻まれた古銅券が発見された。これは、年代的に後のキリシタンのものではなく、秦

氏の原始キリスト教である。そして、名前の“羊”は“神の子羊”である。また、群馬県もその名の通り、奈良時代前後から羊や馬が放牧され、遊牧民の流れを汲む者たちが居たことを表している。

その羊太夫の死後、この地の人たちが彼を偲んで、送り火を毎年行ってきた。毎年8月16日、城山（しろやま）という山の斜面で行う。文字はその時々で異なり、「大」であったり、雨乞いを兼ねて「雨」や「天」であったりする。点火道具は仏教式に108燈が用いられるが、昔は12束の藁であった。そして、集めた柴（大きくない雑木）の束に12人で点火する。

「契約の箱アーク」はシケム→ベテル→ギルガル→シロ→エルサレムへと移されたが、「サムエル記」で扱われている紀元前1050年～紀元前920年頃には、北イスラエル王国のヤハウエの聖所はエルサレムの遙か北の「シロ」にあった。（その当時、「契約の箱」は南ユダ王国の聖所にあった。）これに因んで、「城」という言葉ができた。また、ヤハウエのシロ（聖所）、ということで「ヤ・シロ＝社」である。12束と12人は十二支族と12人の使徒に因むことは、言うまでもない。柴については、モーゼの前に初めて主の使いが現れたのは、柴が燃え上がっている炎の中であった。そして、柴は炎で燃えているのに、柴は燃え尽きなかった。つまり“燃える柴”は、モーゼの前に初めて現れたヤハウエの姿を象徴している。

エルサレムに神殿があった時代、ユダヤ暦7月15日の仮庵（かりいお）祭の時には、神殿の庭に巨大な灯火が設置され、高い位置に掲げられた。そこに来るヘブライの民も、篝火や松明を持って集まった。そして、神殿自体も大きな燭台で照らされた。これらの光は、夜のエルサレムとその近郊を明々と照らし出し、その光景は遠くからも見る事ができたという。人々はその灯火の下で踊った。（盆踊りの起源。）また、イスゴルという死者のための特別な追悼の祈りが捧げられた。（以上、「日本の中のユダヤ文化」、学研ムーブックス参照。）

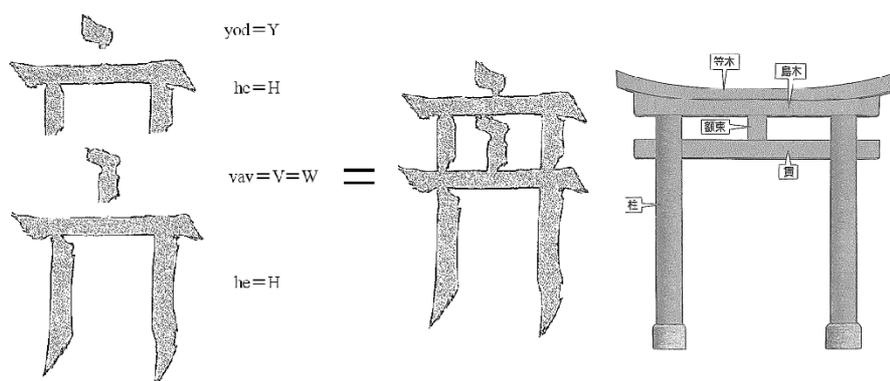
このように、京都の送り火は、ユダヤの仮庵祭が原型であることが解る。仮庵祭とは、出エジプトの際、荒野で天幕に住んだことを記念し、祭りの際は仮設の家＝仮庵を建てて住んだことに因む。

更に、その原型は何と、シュメールにある！シュメール人は、ニビルが天空に現れると、「神々」を地上に召喚する儀式を行っていた。その儀式は日没と同時に始まり、木星、金星、水星、土星、火星、月などの星が夜空に現れる毎に「手洗いの儀式」が行われた。そして、すべての惑星が出揃ったところで聖餐が始まった。聖餐が終わると、一瞬の静寂が地を支配した。その後、大祭司が立ち上がり、讃歌を歌った。“カガブ・アン・エテル・シャアメ（大神アヌの星が天に昇る）”これを受けて、すべての祭司がその讃歌を歌った。（最後の晩餐の後、ゲッセマネで祈ったことに似ている。）そして、ニビルがついに姿を現すと、讃歌を歌う声は一段と高まり、篝火が次から次へと点火されていった。篝火は野火のように広がっていき、ついにはシュメール全土が光り輝いた。その光に呼び寄せられるように、「神々」は天から降臨してきたという。神道の祭祀に於ける篝火には、このような意味があるのである。

では、五山の送り火には、それぞれどのような意味があるのか。送り火は、2つの「大」と「妙法」の文字、鳥居の形、舟の形である。

### ・鳥居

YHWH をヘブライ語で表すと左の図のようになる。これを、下から組み合わせると鳥居の形になる。そして、鳥居がアダム・カドモンになる理由は、左側の文字が下から両足、胴体、両腕、頭と象徴されるからである。



この文字は炎のように燃えている。モーゼの前に初めて主の使いが現れたのは、柴が燃え上がっている炎の中であった。つまり、これはモーゼの前に初めて現れたヤハウエの姿を象徴している。そして、柴は炎で燃えているのに、柴は燃え尽きなかった。また、モーゼは旗竿に「炎の蛇」を掲げ、主は「生命の樹」に至る道を守るために、エデンの東にきらめく剣の炎を置かれた。炎とは主であり、「生命の樹」そのものである。

4つの部分は「生命の樹」の四位階を表し、それは神の戦車メルカバーでもある。メルカバーは人間・獅子・牛・鷲、ケルビム・人間・獅子・鷲、獅子・牡牛・人間・鷲などで表され、人間は流出世界で神の栄光を、獅子は創造世界で神の玉座を、牛（ケルビム）は形成世界で神の戦車を、鷲は活動世界で地上を表す。

そして、鳥居の形の上から一つ巴 (Y)、三つ巴 (H+W)、二つ巴 (W) となる。巴は“神の御心の炎”である。その基字は己、己、己であり、いずれも蛇がとぐるを巻いた状態を表す。特に、己は陰陽五行説では火を表すが、それはまさに「炎の蛇」である。“忌”は“蛇の御心=主の御心”であるから、神宮に於いては死ではなく、この上なく清浄な、という意味で使用する。忌竹、忌火などのように。

鳥居、特にお稲荷さん系の鳥居は朱に塗られているものが多いが、これは「過ぎ越の祭り」で家の柱を生贄の血で赤く染めたことに由来するのと同時に、主の炎を表す。

このように、燃える鳥居は主の炎、ヤハウエの炎を表す。

・妙法

鳥居がヤハウエならば、妙法とは妙なる律法だから、「モーゼの十戒」である。

・舟

妙法＝モーゼの十戒があり、「舟」＝アークだから、「契約の箱アーク」である。

・大

2 つあるということは、「合わせ鏡」である。鳥居、妙法、舟は旧約だから、旧約と新約の「合わせ鏡」である。では、旧約の「大」と新約の「大」とは何か。

新約は言わずと知れた、磔になっている姿で、イエスである。

それに相当する旧約は、ヤハウエではない。ヤハウエは鳥居で象徴されている。ならば、「大」の字の頂点を結ぶと五角形となるから、これは「五芒星＝ソロモンの星」である。

イエスはカッパーラの奥義を示した。カッパーラは「知恵」であり、旧約で知恵の象徴は“ソロモンの星”である。また、日本に於けるカッパーラの元祖の象徴である聖徳太子はイエスに纏わる話が多く、広隆寺では五芒星が聖徳太子の象徴とされているし、カッパーラの奥義を究めた安倍清明の象徴も五芒星である。

送り火は、右の「大」→妙法→舟→左の「大」→鳥居の順で点火されるから、イエス→十戒→アーク→ソロモンの星（知恵）→ヤハウエということになる。しかし、これでは本来の順序からすれば逆である。つまり、「合わせ鏡」で見なければならぬ。よって、ヤハウエ→知恵、アーク、十戒→イエスということになる。そして、右の「大」と鳥居が向かい合わせの位置にあることは、イエス＝ヤハウエということが原型である。

送り火をすべて見渡せるのは、右の「大」が点火される山と、その近くの吉田山しかない。ここは秦氏の拠点の一つ、吉田神社がある。また、船岡山からは、鳥居以外すべて見える。

嵐山の渡月橋、松尾橋などでは、右の「大」が空に浮かび上がり、それが消えかかる頃、鳥居が点火されるのが見える。まるで、「大」の炎を受けて鳥居が燃えるようでもある。他の文字や舟は見えないが、渡月橋、松尾橋の付近は松尾大社、つまり、秦氏の最大拠点である。だからこそ、肝心な右の「大」と鳥居だけが見えれば良い。むしろ、秦氏の最大拠点だからこそ、送り火で最も重要なものが何か、示唆しているのである。「合わせ鏡」も含めると、鳥居の炎＝ヤハウエの御魂がイエスの御魂へと受け継がれることを象徴しているのである。

参考著書：

・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。

初版：2007年5月  
改定5版：2012年6月  
改定6版：2012年12月